明治廿九年十月十日

女學雜誌

第四百廿七號

第四百二拾七號目次

私立明治女學校新築費募集の告白

明治女學校は今を距ること十又二年（時正に明治十八年八月）世間未だ吾國人の私立に成れる女學校あらざりし時木村熊二、島田三郎、田口卯吉の諸氏其他及び不肖善治が發起創立したる者也。之より先き女學校の官立に成るもの若くは外國宣教師諸君の設置に係る者はありしが、民間士人獨立の力を擧げて新文明と吾國風とに適應したる女學校を開設せしものはあらざりし也。此に於て諸氏慨然として此發起あり、爾來十又二年、初一の精神を貫き、官に倚らず外國會社の補助を要めず、單に同情同感ある吾同胞國民に訴へ困厄窮乏の間に漸やく發育して卒業生を出すこと一百四十名に超え、多年の精神次第に貫徹して今や全國到る所に校友あらざるはなし。就中三井銀行の諸氏は久しく懇志を垂れ昨年に及では、三井高保氏金三千圓を寄附せられ、其他某々の諸氏（其の名を公にすることを好み玉はず故に明記せず）尤も同情を垂れて内外の助勢彌よ加はり、此年に至て吾明治女學校は俄然一段の發達を遂け前途の春色大に動きて將に近く爛熳たる光景を呈せんとせしに、今茲二月五日、隣家火を失し不幸類燒の厄に會ひ、校舍別舍、教師館、忽然として烏有に歸し、藏書器械悉皆燒滅し、多年の經營一朝にして焦土となりぬ。然れども、吾等が女學に對して感慨する所は尋常にあらず、素より一敗の故に挫折すへけんや。今や吾等が職責は寧ろ一層重大となれるを覺ゆ、則ち彌よ奮つて倍々斯道の爲に鞠躬盡力せんことを期圖するの念や勃々たり。幸にして三井家再應の助力により同番地内の殘舍を假用して授業を續くることを得、災後十日既に讀書の聲を復し現に依然として平日の如くなるも、速に新校舍を再築し器械を整頓し四方の望に副んことを熱望すること太だ切なり。仰ぎ願くは吾國同胞の諸君、徐ろに吾等十有餘年の經營を吟味し、一片の赤誠只唯だ斯道に盡瘁せんことを望んで他意なきの情懷を察せられ、幸に義捐を寄せて校舍再築の擧を助けられんことを謹て切願す。

明治二十九年三月

東京麹町區下六番町六番地
私立明治女學校々長
巖本善治

前號第四百貳拾六號目次

女學雜誌增刊の廣告

本誌の同人志を起して海外傳道の事業に合力せんと思ひ立ち斷然情義を割きて本誌發行の度數を減ぜしより此の方、正に二星霜を經たり。當初同人の決意は尋常ならず、社員某の如きは自から身を挺し二年月間毅然本土を辭去すべしと迄で定め居たりしが、世態幾變遷、人事大率ね意料の外に出で、當初の計畫にして未だ成就せざるもの十にして尚ほ七八ありと言ふへし、豈に悲しからずや。加ふるに此間不虞の災禍あり、私情素より舊はず。之を公にしては義戰の終末蛇尾に了し、邦家の遺憾千歳に徹す、内外總べて逆運に際すと云はざる可らず。但だ夫れ當初『海外傳道』に發企せし諸盟友の抱負は逆境の故に收縮することなく、隆んに事變を踏破して着々勵行し、今や大日本海外教育會の名を以て現に朝鮮京城に施しつゝある京城學堂の教育事業は、方今總べて朝鮮國より引擧げたる日本人の事業中、殘遺せる唯一の紀念とは爲れり。而して、此事業の基礎今や確乎として最早や拔く可らざるの根底を得たり、惟ふに將來同胞の扶助を得て更に一層の進歩を爲すべきか、是れ吾等の深く慶する所也。飜つて、女學界の形勢を察するに、明治二十二三年以來の反動は次第に薄らぎ、昨年下半期の頃より漸やく隆運を兆し、本年に入つて、挽回復興の盛機正に熟せり。女生就學の數大に增し、女學校新設の數俄に加はり、婦女の爲に發行する女學誌類の續々として創業し來る如き皆な此の大勢發動の現象なり。此に於てか、社友連りに促がし、本誌の增刊を勸奬せらるゝと、極めて優渥信切なり。吾等素より意なきに非るも亦た當年の所期あり、懇ろに陳謝して則ち今に至りぬ。則ち今や之を增刊するも亦不可なきの時か。發行を減じて社友と相逢ふことを少くせしより以來正に二年、些さか本末を明らかにして終始の義を完くす。世上の知己、幸に微衷を恕察し、過前の疎濶を容るして、將來の厚庇を垂れよ。

增刊の事情

一 自今女學雜誌を月二回の發行とし、毎月十日、廿五日の兩度出版すべし。

二 廿五日發行の分は即ち從前の如し。十日發行の分即ち增刊する所にして、本號の如し。本誌の稍や簡易實際を專にし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答、等の諸欄に重きを置くべし。

三 本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んとすると能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵税十錢に定むべし。

四 單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

以上

女學雜誌社白

國史大系

豫約出版廣告

弊社曩きに微力を顧みず、敢て群書類従の出版を企てたりしに、江湖其豫約に應するもの雲の如く、終に之を完成するを得たるは至幸と謂ふべし、其書當今全部既に賣盡し、市中の相場騰貴して豫約價の三倍に至れり、是れ豈に史界祝すべきの好況にあらずや、夫れ群書類従は史學參考の書たり、然るも尚右の如し、而して國史の本幹たる六國史以下の書に至りては、尚舊刷若くは寫本の形を存し、特に其價の高貴なるのみならず、或は百方捜索するも得る能はざるものあり、是れ實に當今の一大欠典なり、是に於て乎弊社は更に微力を茲に致し、六國史以下國史の本幹となるべき要書を蒐めて、一叢書となし、題して國史大系と曰ひ、之を印刷して以て江湖の高需に應せんと欲す、是亦大業なり、願くは大方の翼賛を辱うし此目的を達するを得ん、

第一　此叢書の書目左の如し

日本書紀	續日本紀	日本後紀	續日本後紀	文德實錄
三代實錄	日本逸史	宇多天皇實錄	日本紀畧	扶桑畧記
古事記	先代舊事本紀	神道五部書	釋日本紀	延喜式
令義解	類聚三代格	延暦及貞觀交替式	類聚符宣抄	水鏡
大鏡	增鏡	榮花物語	世繼物語	續世繼
愚管抄	百錬抄	北條九代記	元亨釋書	古事談
十訓抄	古今著聞集	今昔物語	宇治拾遺物語	公卿補任

以上の書を蒐めんとせば現今代價百數十圓を要す、而して尚得る能はざる書あり

第二　此叢書の定價二十圓にして豫約價十圓なり

第三　本年十月中一時入金のものは右豫約價にて高需に應ず、若し毎月一圓づゝ入金せんと欲せらるゝに於ては本年十月より明年九月に至るまで總計十二圓を拂込まるべし(但遞送料は此外に申受くべし)

第四　此叢書紙數大約一萬三千頁にして之を十七卷に分ち來る十一月より着手し明年二月より毎月一卷若くは二卷を發兌し十二月を以て完了す、躰裁見本御入用の方は郵劵貳錢投せらるべし

第五　此叢書の製本躰裁は弊社出版群書類從に同く四六形洋裝クロス表紙金字入りとす

第六　豫約申込期限は本年十月卅日迄とす

發行所　東京市京橋區彌左衛門町七番地　合名會社　經濟雜誌社

女學雜誌

第四百貳拾七號

明治二十九年
十月十四發兌

社説

實地の家政學

書籍には不思議の魔力あるか、奇しくも人を迷はして格外の信仰を起させ、一種の偶像崇拜に執心して只管之ををがむに至らしむ。

此の故に古來、書籍を讀むとを學問と心得、讀んで積上げたる書物の嵩が高くなれば、夫にて吾智慧は伸たる者の樣に思ふ族きはめて多し、非常の間違ひなり。

古へより學者が物の役に立たず、稍ともすれば文字の講釋に溺れて頗ぶる實地に迂遠なるは、其の誤なり必竟書籍を信じ過ごし、只だ本よみをもて學問と心得たる間違より生ず。維新の頃、或る藩に改革論起り、改革黨の聲援を背に脊負つて、當路に躍り出でたる某儒者と云ふ大先生あり。其先生平素の議論は、天空海濶の識見にて、宇内を呑吐する慘まじき經綸あるやうなれば、今や定めて目覺しき改革のあるとなるべしと、人々目を刮つて見てあれば、先生出登第一の改革案に云く、從來糊を使用したるは費多し、自今辨當の飯粒を粘つて飯糊をつくるべし、是れ第一たり。從來、糸を使用したるは費多し、自今反古紙を仕舞ひ置き、かんじよりを捻つて用に宛てべし、是れ第二なりと。即はち是れ儒者先生經濟上の改革案にてありき。

凡そ、本ばかり讀みて空想を樂しみ、己はえらい物であると自から定めて、至極便利なる早速の斷定を取きめたる人々が實地の仕事に當るときは、いつも、大方此類の結末を仕出かすものなり。

左れば、讀書の學問に卒業したる自分きめの早ざとりは、實地に當りて殆んど甲斐なきもの也。如かず、實際に經驗して、實事の與ふる苦き汁を飲み、手に握り膚に着ける心地して直接に工夫し、無言に自得したる生ける經驗の有力敏活なる

には。こゝをもて、眞に學問の主旨を心得居る人は、實地の經驗を重しとし、又、經驗ある人の實歷談を特の外に珍重するもの也。必竟、書物は人の經驗と考とを書とめたるものに過ぎねば、書物を重んずるの主意も亦た此處に存するとなれど、人々多くは之を覺らず單に文字の末に拘泥し、又は、事實の暗誦などに屈托して、其の敎ふる活ける敎訓を見ぬくとなし。扨て、經驗は即ち書中に記すが如き事件を自から試むるとにて、之に優りたる利益はなし。次に、經驗ある人に實地に聞くは、書物に優りたる有力のものゆゑ、書を擲うつても先づ之に謹聽すべき筈なり。然るに、自分經驗の便りもあり、實地の人に聞くべき由縁もあるものを、わざ〳〵讀書に耽りて書中の奴隷となるは何事ぞや。

以上の注意は單に今の男學生にのみ言ふとならず、等しく亦た今の女學生に向つて注意する所ろ也。女學校の學窓に五年六年の讀書を爲しつれば、何か大相の學問でもあるかの如く考へ、直ちに學者を氣取つて、古老先輩を凌ぎ、毫も經驗なき家政を預かつて、手輕ろくも改革沙汰を試むるなどは以ての外と云ふべし。かの古風の婦人はたとひ文字の書物こそ讀まざれ、實地の學問に生きたる事實を經驗し、十年二十年の慘憺たる苦辛を經たる老功のものなり。言はば千軍万馬の間だに生ひ立ち、幾多の苦戰に生命を全くせし老將にも比すべし。年少の女學生は謹んで其の經驗を聞き、其の工夫を學び、其の自得を味ひ、もつて吾が心得とこそなすべきに、かゝる先輩の常とて、寡言素朴なるを無智識のやうに思ひ做し、頭まより之を馬鹿にして絕えて謹聽の覺悟なきは淺ましきこと也。凡そ、自得したるとは、口に輕々しく言ひ得べきものならず。實地經驗上に得たる智識は、書物で覺えたる口さきの議論と異なり、之を喋々と辨ずるとは出來ぬもの也。左れば、斯る老功の人の得たる所を聞かんとには、仔細に其の實行に注意し、其の一言二言の深き重やかなる經驗談を嚙み分けて、つく〴〵と自分に工夫せざる可らず。輕薄にして淺々しき心得にては、到底其の敎訓を受入るゝとは出來ぬもの也。然るに、今の女學生には、兎角此の心得なく、此の心得を工夫せんとする人すら尠なし。

斯ては、折角の女學も無益の學となるべし、愼しまざる可けんや。學問の要は、實地にあり。之を活用すると能はざれば、

學ばざるに異ならず。否な、其の學ぶに時日と入費とを空費せし丈が、學ばざるものには何ほ劣ることとなるべし。左れば、今の女學生たるもの、かの男學生が空に文字の學に耽つて遂に無用の廢物となりゆく近き殷鑑にかんがみ、單に讀書文字の死學者とならず、實地の經驗は活たる學問と心得、古老先輩の談話は、活たる書物と心得、すべて之を活用して吾が才を活かし、如何なる時にも實地應用の器量を磨くことに心掛けらるべきもの也。之を稱して實地の家政學と謂ふ。

舊家の改革容易にすべからず

人はつねに改革の氣象なかる可らず、就中、年少きものにありては、一日も此の氣象の張りを弛るむべからず。弛るめば最早や老人と異なることなし、何事も保守消極の引込思案に流れて、生々としたる活潑の所行頓に消失すべし。改革の氣象の大切なることは疑がひもなきことながら、改革の手段に至りては篤と熟慮し、仔細に工夫して慘澹たる經營を盡さずんばある可らず。只だ熱心なれば可なりてふ淡泊一徹の覺悟にては、意外の惡結果を來すことあらん。取分けて用心すべきこと也。

男子の學生が學校卒業の勇氣をもて、空中に幾多の樓閣を築き、國家の大事迅速に決行せざる可らずとて、猛然手を下すもろ〳〵の改革が、事に當つて着々要緊に外れ、迚も實地に行はれがたき空想たりしこと分り、茫然自失して慚愧後悔することのあるが如く、女學生の家庭改革も往々にして失敗に歸するもの也。

西洋風の家庭を見て、其の秩序と和樂とに驚ろき、其の夫婦伉儷の睦まじきを見て之を羨やみ、空想の天使翼を擴げて、忽まち田舍故郷の舊家庭に舞ひ下がり、忽まち以て之を改革し、一日にして彼の西洋風の外形に摸倣せんとす。其の失敗に歸せざるは稀なり。

凡て、物は其形を異にして、其の精神を同うするもの多くあり。西洋人は手を握れども、日本人は腰を屈め、支那人は長揖す。皆な禮の式は異なれども、其の旨に至つては一つなるが如く、他のもろ〳〵の事之に準じて皆な異同あり。單に、其形の相異なるに驚ろきて、輕忽として之を改革せんとする

は、穩やかならず。
舊國には舊國の習慣あり、舊家には亦た舊家の家風あり。而して家風は一家の不文憲法の如きものなれば、之を俄かに變改するは宜しからず。また假令ひ變改したりとも、多年の習慣の團結する所なれば、中々に一朝夕の能く其の根本を動かし得る所に非ず。されば變改し得たりと惟ふものは只だ其の外形にして精神にはあらざるべし。既に精神にして改まらずんば改革の實何處にか存する。故に外形はよし元の儘にあらしむるとも、其の精神を變改するとに心がけ、此の心がけの爲めには、功を急激にもとめずして、永遠に而も確實なる成效を期し、次第に其の精神を變へて而して後ち外形に及ぼすに至らしめよ。之れ眞の改革に非ずや。
且つ夫れ病を治するには病態を診察し、病元を鑑定し、其の根本に藥を投じて全然たる快復を希がはざる可らず。夫には先づ篤と病人の容態を視るとが大切なるに、彼の學生が舊風舊弊を治療せんとする時に際しては、毫も此邊の用心なし。喩へば、西洋人の躰格を手本にして生理學を學び、一朝、其規則を日本人に當はめて、ソレ丈何寸短かし、ソレ色何程黑し、則ち此の病氣に外科手術を施こさゞる可らずと言ふにひとし。女學生が舊家の家庭を改ためんとするに臨みては、願はくは如此き不容赦あると莫れ。

むかし、水野越前が大儉約の政治を布き、ちとの奢をも制して、手嚴しく取締を斷行せしとき、茶屋に上つて料理を食するものも、初鰹は無用、鯛の吸物は無用、あらひは無用、總べて美味の馳走は皆な無用と嚴禁せられ、成程此等のものは一切注文せず、見わたす所ろ、野菜の吸物、三葉のひたし物などにて三獻をあき足れりとする爲躰にてはありつれど、殊に知らず、此の三葉野菜は、わざと、温室そだてのハシリにて、一本一本のえりぬき大層の人手をかけ、代價は反つて珍魚大肴にも立優りたるものなりしとぞ。たゞ外形の取締は總べて此類の結果にとゞまる。新婦人が家庭に執行せんずる新らしき憲法が、たゞ此樣の末路となりては馬鹿らしきとならずや。
西洋に較べては、賃銀も安く、時間も定まりなく、人の往來にも規則なし。家内の扱かひ、親類の附合ひ、總べて風を異にするとゆゑ、西洋に倣つて我家庭を改たむるとの難きは言

ふ迄もなく、東京の家風を田舎にうつすとも六かしく、田舎の舊家の家風を新家の家風の如くせんとすら倘六かし。何れも其の場合相應の運用なかる可らず。

左らば、女學生が種々新らしき學問を爲し、西洋の事情などを見聞するは無用なるかと言ふに決して然らず。總べて書を讀んで之を在のまゝに信用すれば書なきに如かずと申されし如く、學問して其の學問どほり一律一偏に何處にも適用せんとすれば、夫は學問なきものと同じきと也。之を迂と云ひ、又、愚とも云ふ。學問の用は運用にあり、其妙は變通の手段にあり。學問によつて所見を廣くし、參考を深くし、實地に臨んでは、之を融通變化して應用の妙をつくす。活學者の才は茲にあり。女學生も亦た其の女學を活用せずんばある可らざる也。

然るに、今の女學生が舊家に入つて忽まち衝突し、暫時にして信用を落し、折角の學問あれども無きが如く、否な無きものよりも倘劣るが如く見做さるゝは、必竟、學問を死ろして活用の才鈍く、本に讀み先生に聞きたる通り一徹を其まゝに施こさんとするが故也。斯ありて失敗するとは勿論なり。單に學者のみならず、藝人にても何ものにても皆然り。何れも變通活用の實際手段の工夫をせざれば、何處何如なる場合にも甘く適當せんとは難し。

察する所、舊家に入りて空しく恨み、長く太息して女學の功なきとを歎ちつゝある女學生も亦た尠かるまじ。遙かに、其人に告ぐ。御身決して他を恨み亦た女學を蔑みする勿れ。其過まちは御身にあり、即ち御身の無學にあり、何んぞ御身の學問にあらんや。學んで應用の才なく、行つて忍耐するの氣根なく、暫らく試みて直ちに衝突し、衝突して之を滑らかにすること能はざるやうにては、たとひ舊家を去つて何處にゆき、其學を振すてゝ、よしんば一藝に着手すとも、遂に等しく無効なるべしと。人は何處にゆきても其人の器量次第の事の外出來ざるもの也。之に反し其の器量だにあらば、何處にありても遂には好結果を奏するもの也。故に目前暫時の成敗によつて變心せず、ちつと辛棒して眞實に勉強し、氣を長く根を強くして必らず眼前の首尾を善くすべし。一事は万事の見本なり。もし一事を能くすれば、他の事も亦た成就すべし。舊家の改革よく出來せば、舊國の改善も亦た出來べし。輕

輕しく恨み、輕々しく失望し、輕々しく地位を變へんとする如き輕薄臆病の人は、たとひ何事をさせても依然同様の人物也。

家庭

一家を幸福にする要件

星野光多

家を幸福にする要件は、之を抽象的に理想せんより、實際幸福の圓滿せる家に就き、靜かに其幸福をなす由縁の次第を觀察することそよけれ。吾人幸運にして世にも稀なる幸福の家を見出し得て、而かも暫時が程、其内に同居し、其視聽に觸れて心に感ずる所に於て、特にその幸福の要素と思はるゝ所のものを數へば、概ね左の如くあらん。

其一　共同の精神家中に行き渡り居る事

一家を組立つる所の男女老幼の利害同一にして、假令ば夫たる者の幸とし不幸とする所のものは、妻も子も同様に之を若く相感じ、家中の一人に臨める事の善悪は、凡て他の者にも亦同様の影響を及ぼさゞるはなく、一家全躰の五人若くは十人、恰かも根幹を一にせる樹木の如く、其生命も、その榮辱も、共に一躰に在りて等しく之を感ずるもの、正しく人の家を幸福ならしむる所以の一なり。

其二　各自、家の務と責任とを分擔すること

一家小なりと雖ども、自ら是れ小なる一の王國なり小なる王國には、財政もあり、外交もあり、警察もあり、司法もあり、衛生もあり、敎育もあり、道德もあり、宗敎もありて、而かもその役柄たる、一家を組成する所の老幼各自に相當せるものあるなり。されば朝、夙に起き出でゝ外の百事に勞する夫あれば、料理裁縫何くれとなく八方に目を配りて、家事全躰を總理する所の妻もあり。他日の大成を期して、辨當腰に、甲斐々々しく出行く學校通ひの小供兩三人あれば、活ける暦ともなり、歴史ともなりて、内外に關する格式制度の万事、行届かぬ所なき老人もあり。斯く各自その分擔する所をば、強て爲んとにもあらで、それ〱精勤しつゝある、是れ亦幸福の家に必ず存すべき現象なり。

其三　一家資産の増加すること

如何に氣品高尙なればとは云へ、精神上の素養豐かなればとは云へ兎に角に血肉を具へたる者のためには、居宅衣服、食物等の次第々々は、資力なくしては一も叶ふまじきものなり。其他臨時の出來事に向つても多少の豫備あらでは、心を安んずべからず。子供の成長せる曉には優に之に教育をも授くるの覺悟もなかるべからず、又時には上品なる風流樂事もて、一家の和樂をも助けさるべからず。されば其家の財政も徐ろに都合よく成りて、財源も漸やく强固となり來るにあらずんば、一家の幸福も時々種々意外の事情の爲めに傷損せらるゝを免るべからず。

第四　別懇なる交際の出來る事

一個人として、女は女、男は男、老人は老人、子供は子供と、それ〴〵特別の交友を有するは自然の事なるが、此外別に共同の友、若くは家の友とも稱すべきものありて、彼是家として互に相交はるものあり。その最も近き所を云へば、我と別居せる老父母許、叔父叔母の家々、その兄弟姉妹が各々一人前の家持となりて、我がために義理ある兄弟やら姉妹やらが出來て來り、而かもその家々に子供まで生れて、憫むべし、年若き我妻まで我に連累して此頃は此處彼所から、叔母樣々く々と呼立られ、遙かに自分共の位置の尊きを感ずるなど、自然に我家の幸福に影響を傳ふるものなり。其他其特別なる場合やら、職業上の關係やらよりして、別途の交際向開け、御互の間柄普通行きもし來りもする事の外に、吉凶禍福決して互に之を他人の事となさず、その都度々々當方にては、一家の者、一同額を集めて相談し、その相談の結果として、御喜びやら、御悔みやらの使節は、誠實なる情誼を傳へて相往來し、彼是與ふる方の家ともなり、又は受くる方の家ともなりて、結局我家の幸福を大に増加するの効能あるなり。

其五　清き文學の愛好せらるゝ事

文學など云ふ時は大層らしく聞ゆれど、書冊類は云ふに及ばず、新聞にても、雜誌にても、苟くも清き消息(インテリジエンス)を外界より紹介し來るものゝ、其家内にて珍重せらるゝことは、少なからず、その家人の思想、精神、趣味、言語、儀容等に善良の感化を傳ふるものなり。斯くて世界の清き思想やら、理想やら、詩情やら、道念やら、恰かも勝手元に仕附けたる水管の淸水を供給するが如く、家人その智に於て、その情に於

て、その意志に於て、悉く皆な聖き感動を裝り、かくて所謂ヒューマニチーなる高潔の人情、一家人の胸中に汪洋として盈るに至るなり。

其六　更に一ヶ條を加へざるべからず、聖き靈界に生活する事是也

何れの家幸福なりと云ふと雖ども、其田園の片隅に墳墓を有せざるものやある。又何れの宮殿が曾て死に瀕したる病弱の躰軀を載せざりし坐敷やある。無情の風は何時其家の最愛花を散らしむるや知るべからず。況んや、又此世長へに無事なるを期せず、我屋の基礎たる此大地、何時震烈せんか、我家の庇蔭たる彼蒼天、何時墜落せんか。人の我を害せんと謀る者無き乎、事の豫期に反して敗るゝの憂なき乎。而かも健康の我體、今夜死を來らしむる所の勢力を宿せる亦知るべからず。凡てその設計の悉く失敗したらん曉には如何、その折角の蓄積の一朝にして悉く烏有に歸したらん場合には如何。我妻、我夫我子女の不幸不運にして一朝に死亡せんには如何。只それ之を杞憂する丈けにしても、凡て此等に屬する榮華の光輝は、その半ば以上消滅するにあらずや。況んや、實に此の如きは徒らに杞人天の落るを憂ふる類にはあらずして、何人の家にも遠慮なく臨まんとするものなり。茲に於てか知る、宗敎的信仰ありて、その家人に眞正安心立命の悟達あらしめずんば、その幸福や、決して圓滿にして永續すべからざる事を。此天の外に更に高き天を觀、此日の外に更に光明ある日を仰ぎ、此風、此大氣の外に、更に聖き大氣を呼吸しつゝありて、而かもその血肉の倚ほ物質界に繋るゝに拘らず、その靈性に於ては、靈なる至高至絶の別天地＝永遠の靈界に住まんもの、此の如き人士のみ、能く永遠無究の幸福を有するなり。此の如き家には死もなく、涙もなく、滅亡もなく、離別もなきなり。一家に五人あらんか、既に永遠死ぬまじき五個の靈性、其所に存するなり、此靈、其至大なる抱負と、貴重なる運命とを以て、互に靈界に活動し、其靈能を練達しつゝ、又互に相親交す。靈界に屬する交親、是れ實に一家の幸福を圓滿にするもの也、完全にするもの也。

以上數へ立てたるものゝ外、別に一家の幸福をなす由緣となすべきもの多少之あらんと雖ども、此等は慥かにその重立たる者に相違なかるべし。偖次に此等の諸要素を生ずる譯柄を

考ふるに、固より人々の天性と、教育境遇等に因る所なきにあらねども、要するに人々の心掛けこそ第一緊要のものたり。されば始めて家を持たんとして先つ妻を索むる者に在りては、その性質教育等をも取調べ、所謂一家の幸福をなす由縁のものを、先づその人の性質教育等に於て豫想して、之を撰擇するを得べきも、今日既に一家を成せる人々にありては、如何に相互の性質が面白からねばとて、更にその人を取替へる譯にもなるまじき次第なれば、只家を幸福にする一本鎗は、相互にその然る由縁を會得し、心掛けの上に於て全然一致團合するにあるべし。かくて互に忍び合ひ、助け合ふ間に於て、自から共同の精神も生じ、隨つて期せずして互に其勞を分擔する樣にもなり、又隨つて家の資產も增殖すべく、家族も繁昌するに至るべし。而して宗教に關しては漫に自分の都合よければとて、冷淡主義を取らず、世に果して人情を淸め、且つ高め、天性を開き、且つ完うするに足るほどなる有力の宗教ありや否を研究して、之あらば斷然として之に皈依し、世間彼此の風評などに毫釐も遠慮せぬ決心こそ極めて大切なれ。文學類に至りては、こは家長の心掛け次第にて家庭の讀物類一切善良の感化を來らす方法たらしむる事左まで六ヶ敷事にもあらざるべし。

思ふに人生の幸福を來すもの、家庭の幸福に過ぐるものあるべからず。而して此幸福は何人によりて得らるゝやと云ふに、極めて貧乏なるか、極めて富貴なるかの兩極端に立てる者に在りては、恐くは之を得る極めて六ヶ敷からんも、否らざるに於ては、上等の人にても、中等の人にても、下等の人にても、所謂家人同士の心掛け一つにて之を得べし。是れ誠に公平なる天道の配劑にして、斯く考へ來れば、吾人は徒らに彼の世の富豪、その富貴ゆゑに、人生に屬する幸福の眞味を含味すること能はざる者のと、其外部の榮華ゆゑに、之を羨やむに及ばざるなり。

山あそび

秋の山

淡海子

春は海秋は山四季折々のながめいと多かる中に、一入遊興の深きは、今日このごろの茸狩にぞあらむ。東國にありては茸

がりの樂しみを味ふとあたはざれど、畿内、東海、東山、山陽、山陰の諸道にありては、山として茸の生ぜざるはなし。

松茸の生ふる山は、その土質赤褐色又は淡黄色なるべし。斯る土壤には赤松生ひ繁り、松の落葉は地を覆へり。巨岩は聳えて、溪深く水たゆることなく、凡て名山靈嶽なるが多しとぞ。秋の山には浮華の裝ひなく、木々の葉末は唐紅を色どるあり、或は幽邃なる溪間には松柏鬱として、ほの闇きまでに繁みて靜けき境あり。將又溪流の激して玉を散らすあり。そも名山には靜境あり激動ありて、自然の變化はいと莊嚴なる心地するなり。

茸がり

茸狩の遊山は男女老幼打連れて、家族的の睦び合ひあるが樂しかるべし。山上の見晴しよき面白き岩などを探して、一個の大テーブルとし、こゝに一日の生活を營むにあるなり。茸の生ふる山は秋の彼岸より止山と唱へて、官有民有の別ちなく總て人の立入るを止めらる。故に止山となりたるときは、茸狩の前の日山主と約束して、茸の生ひたる好き場所の幾分を買入るべきなれど、茸の出盛り過ぎて後ち、止山の明きぬれば最早何人も自由に立入り、思ふ存分山に遊びて茸を採り得るなり、山明の後にも猶ほ獲ものはあるべし。

山遊の調理

松茸の賞味は香氣を尙ぶ、香氣の鮮なるは山にて即席の調理にあり。香味最も佳きは燒茸なるべし。止山の明くる頃少し晩れて躍り松茸と謂へるが簇がりて生ふ。その樣は恰も盆躍りに似て、中央に大なる松茸一本あれば、其廻りに小なる松茸の丸ろく連なりて生ふ。されど小なるは落葉がくれとなり、或は土中にひそめるものなれば、氣付かずして見殘すこと多し。さて松茸を山にて調理するには、淺く土を穿ちて其中に松茸を一本づゝ並べ、其上に松の落葉を積て、火を點じ、中ごろ燒き返せば、松葉薰りて風味香ばし。燒茸の下汁は醬油に柚子の液汁を絞り落し、藥味には又柚子の皮を擂下して用ふれば佳し。松茸を炭火にて燒くには、炭火の上にて松葉を燃し火の上に灰を掩ふ樣になしてのち、金網を渡し茸をのせ其上に水に浸したる布を緩く絞りて覆ひ、蒸し燒きにすれば、香氣失せず味ひ美なり。凡て山の調理は不自由なるが中に、種々の工風を凝して樂しむが雅趣あり。其一二則をあぐれば、

紅さす木の枝を切りて箸となし、濶き葉を採て皿にかへ、燒茸には庖丁入れずに裂くを佳とす。茶には溪の水を汲むなど又面白かるべし。

調理用のもの

玉子。干瓢。椎茸。湯波。紅薑。紫蘇。芥子。山葵。胡椒。柚子。根薑。大根。胡麻。茶。醤油。砂糖。燒鹽。味噌。外に煮しめ類、こん爐、小鍋、藥鑵、きうす、茶碗、鉢、皿、山葵下し、金網、小桶、貝じやくし、小びしやく、庖丁、ナイフ、飯櫃（中身共）、重箱毛布其他數品、供一人附添ひて運ぶ。

下女の拂底

日本に來り居らるゝ外國宣教師などは、宣教者の常とて、給金なども餘り多くは受取らぬとゆゑ、本國にあつては極々質素の暮しをなし、買物より煮たき迄、夫人御自身が一手にて辨ぜらるゝとなり。然るに、我國に來られては、二三人の下女を雇ひ大相の暮しを爲す、其狀、外國にある時と雲泥の相違なれば、人之を許して、日本にある宣教師は殿樣のくらしを爲すと言ふ也。其故は必竟、下女の給金が廉價なれば也。外國にあつて一人の下女を雇ふは容易の事にあらずとぞ。

然るに、此の廉價なる下女の給金も次第に騰貴し來る。もし習慣の爲めに左樣に急に格を上げるとは出來ぬとて元の如くする地方に在つては下女になるもの尠なし。隨がつて、不得止、其の給金を上げる樣になる也。

何故かく下女の給金が高くなるかと言ふに、近年諸方に製造所勃興し、女工を要むると多く、其の賃銀も亦た割が善きゆゑ、朝から晩まできまりなしに追ひ使はるゝ下女奉公よりは、時間のチヤンと定まつたる製造所がよひの方が樂でもあり、又中には洋服を着たり、官立の製造所に通よひなどして、何となく出世したる心地もし、其上、年が立てば段々賃銀も上る故、何の途之を樂しみにして自然下女奉公を嫌ふやうになり、扨ては斯く下女の拂底を來せし也。

此後の成行きは如何んと云ふに、此の形勢は次第に増す許りなり。隨がつて下女の給金はいよ／＼益々高くなるべし。尋常の家にてはなか／＼一人の下女を雇ふとは出來ぬやうになりゆくべし。

何故此の形勢が次第に增す許りなるかと言へば、勿論、前に述たる製造事業などがいよ〳〵隆盛になる爲めたるは申す迄もなけれど、其外に今一つの大理由あり。

之は未だ世の論者もあまり注意せぬやうなれども、必らず大關係あるべしと信じて申すとなるが、其事たる他なし、軍備擴張の事これ也。もし今の計畫の如くに軍備が擴張せらるれば、是迄、丁年男子百人に付一人足らず徵集せられしものが、此後は百人に付六人程も兵隊となる譯ゆゑ、丁年倔强の男子が製造、事業、勞働などの社會より拔取らるゝと大相の數なり。隨つて、男子の賃銀は非常に騰貴し、從來、男工を使用せし多くの事業界は、迚も其の賃銀を支拂ひ切れず、止むを得ず女工を需むると甚はだしくなるべし。隨がつては、女工の賃銀亦大に騰貴するに至らん也。

こゝに至れば、下女の拂底はいよ〳〵太甚しく、下女の拂底いよ〳〵太甚しくして、尋常家庭の取扱かひ方は、次第に變りゆき、主婦の務めも亦變り、客のもてなし方も亦變り、一家家政の模樣遂に全く一變するに至るべし。

東京と西京との染物

報知新聞紙上にて、先頃染物の事に就き、種々調査報道ありし中に、京都と東京との染物の比較をいへる箇條、いと面白けれぱ、左に拔錄するとせり。

染物と云へば、京都に限られたる如く思ふものあれども、近頃は東京にても京都に劣らざる染物を出だし、却つて京坂地方へ向けて輸出をなすに至りぬ。殊に更紗染の如きに至りては、東京獨特の染方にて、全國第一の染物を以て誇る。京都にても之れを摸倣する能はず、頗る江戶兒の氣を强くするものありと云ふ。元來京都にて染物の發達したるは、河川の形勢、水質の佳良なるに依れりと雖も、又別に歷史上の關係ありて、今日の發達を見るに至りしなり。即ち同地は歷代の都となりて文物の粹を集め、高尙優雅なる大宮人風なるものを作り出し、又室町時代の如きものありて、豪奢華麗を極めしかば、衣服の制度も自ら粹美に傾きて、染物の如きも、非常の進步をなせり。又染色の如きは、京都にては早くより發達し、延喜式には四十八種の染色を揭げたり。思ふに此等の染色は、悉く日本にて發明せしものにあらず。當時唐朝との交通繁かりし故、彼地より齎らし歸りたるもの、多かりしなるべし。斯くの如き諸原因の湊合して、京都染物の發達を來たしたるが、之れに反し、東京は最初質朴なる三河武士に依りて、組織せられ、衣服の如きも殺伐の遺風を脫せず、寬文頃より漸く奢侈に傾き來り、元祿に至りて、江戶の粹を現はすに至る、左れども當時使用せし、染物の大部は、之れを京都に仰ぎたるものにして、江戶にて染出せしものは至りて尠なし。若し西京の例を以て推せば、此時代には、江戶染物の發達すべき筈なるに、左ることのなかりしは、聊か不審に堪へざれども、之れには又た發達を阻みたる原因あり、其原因とは他なし、即ち東都には染物に適當なる河川の缺亡したることなり。西京の市中には、有名なる鴨川あれども、東都には斯る淸絕の流なく其の川と稱するもの、多く潮流を受けざるはなし、是れ東都に歷

史上染物の發達を來たすべき原因を備へながら、地勢のために制せられて、其精華を發揚する能はざりし故なるべし。然るに近年に至りて諸種の方法に依りて此河川を利用し、向島柳島等に染物工場を起すものあり、向島の如きは、專らモリンス友染を染出して、京都の品と拮抗せんと欲し、柳島の如きも金巾、更紗、中形木綿等を染出して、京坂地方に輸出せり。又た日本橋立花町の大彦の如きは關口の水道を利用し、目白不動坂の下に工場を越し。嶄新なる意匠物を染出し、明治染物の粋を現はさんことを勉めり。左れば東都の染物は之れより益々發達し、遂に本場たる京都を壓するの期あるに至らんと云ふ。

染物の模樣も東京の方、却つて西京に優りたる如く、西京は手數を懸けたる割合に、見榮へなく、東京は一寸としたる呼吸に妙所ありて、西京の如き手數を懸けたるものなし。而して其の何れが人氣に投ずるにやと云ふに、無論東京の方流行を制するなり。今其の一例を揭げんに、此頃流行する絽の帶地は昔時流行たるものにて、其後廢りたるを四五年以前立花町の大彦にて復興し、試みに賣出したるに、忽ち人氣に叶ひ、今日の流行を見るに至りたるが、同時に西京にても、同じ帶地を染めて賣出したれども、其模樣の帶地に適せず、何にか衣物の地を直したる如く見えしかば、大に失敗を取りたりと、而して此西京のものと、東京のものとを比較し見るに、西京のものは其の意匠に於て、又た其色合に於て、東京のものに優りたれども、何處となくボンヤリとしたる所ありて、東京のハッキリとしたる所には及ぶべくもあらず。這は單に帶地の一例なれども之れに依りて其他を察すべし。

○帶の話

○○男帶　西洋にて衣服に帶を用ゆるは土耳古、波斯邊の人種のみ、日本人種も其等と同人種なれば伊弉諾尊の時代にも帶ありしこと古史に見えたり、昔の帶は勿論唯布の長きものにて、今やあられもなき名を付られたる褌（ヘコオビ）帶と云ふものこそ其の本來の形なるべけれ、此は維新の頃九州人の出府多きより江戸に流行し始め、今は經濟向なりとて誰も用ふれど、其れまでは綿を入れて强ばらせたる博多小倉の類のみ行はれ、唯々職人社會に限り、八端織の如きものを尻の頭に結ぶを見たり、之を三尺と名づくるは其長さより名づけたるならん、近頃は京大阪の風が染みたるにも非るべけれど、東京の職人に三尺を締める者減じて、角帶を締むるもの增したり、是れ商人が紋附を着けて官吏ぶると同日の論なるべし、男の帶の締め方は、維新前まで士人のみ用ひし挾み帶と唱ふるもの（今は劇場にて見るのみ）及び今用ゆる貝の口と云ふもの丶みなり、褌（ヘコオビ）帶は九州人及之を眞似る書生には紺絞りなど用ふる者あれど、通例は白か淺黄の縮緬、乃至白木綿なり、古渡更紗など溟六一聖の二三年前通人めかして用ひしことなれど、流行までに至らずして已みぬ、

○○女帶　古代の帶は女と男と同じ形なりしなるべし、元祿の頃名古屋帶と稱し、馬鹿〱しく長き打紐を腰に卷きたる繪多く見ゆ、甚だ不便の品なれば永からずして廢れたりと見え、後の繪には男帶の如く巾三四寸の者を用ひたるを見る、大なる尻むき出しなれば、褂を着ざる姿は餘り外見佳からず、（維新前までも大名の奧向きに限り、附け帶とて、帶の先を垂らす代りに厚紙を卷きて、其小口より挿し込み猫の首玉の如く突張らせたる風ありき）褂を用ひざる風俗になりてより、帶は段々巾廣くなり、舶來の繻子が丁度恰好の幅なりと云ふに至れり、文化の頃の繪を見るに、其の結び餘りを垂ること非常に長く、今も藝妓が時々爲す如き風なりき、是れも階子の上り下りなどに不便多ければ、藝妓とへも明治の十七八年より二十五六年頃迄は殆ど此風をなすものなき樣なりしが、其後復もや恢復せり、扨て此の巾廣き帶の流行に伴はれて、其の結び方色々に發達し、少年又は子供の結ぶものに「やの字」、「堅やの字」、あり、今も盛裝の時のみ六七歲より十四五歲の女之れを用ふ、大人の結ぶものに尻掛（シリカケ）あり、お太鼓と云ふは大小通じて用ふ、天保頃より後此の風に一定せしもの丶如し、今も京大阪には「だらり」、「文庫」など未だ樣々の風あり、而して令孃と侍婢との締め方區別ありと聞きぬ、是れは東京に限ることなるが、近頃段々帶上の心大きくなりて、未婚婦の如きは殊に大なるを用ひ、昔は中に神佛の護符を入れるに止まりしものが、後には唯々形容の爲めとなり、三絃の胴掛も古くさしとて今は新聞紙の反古や糸瓜の殼を以て之れを膨らまし、其の大さ長さ六寸、巾三四寸、厚さ二寸五分乃至三寸と云ふ馬鹿

げたる大さになりければ其重くして耐え難きに顧みて、「蹴拔き」、「ヘチ入」など殊更に製して賣ることゝまでなりぬ、然れば適れ巾廣きお井ドは隱れ得るも、其後に突出することこ甚だしく、雨の降るときは流行の小形の深幅幅の女傘にては、其迹も其濡るゝを防ぐこと能はざるなり、今や幸に人力車と云ふものありて、雨には早速之に乘ることを得れども、昔の如く、それ雨と云ふや、達てゝメめたる帶の上へ手拭を卷き付けし世ならば如何ぞや、右の如く右の帶の背ろが出張りたるに附ては、狹き所を橫には通り難く、勞働をなす時にフヮ〳〵として不便なるは言ふ迄もなし、然れば下女輩は早くも一便法を發見せり、抑々世の中に下女の風俗ほど速かに一定するものはあらじ、嘗て京大阪間の中籠が手拭よりも便利なるを知るや、一軒の家にて用ひ始むれば、是は冬の寒さに暖かく便なりとて吾も〳〵と眞似て之を用ひ、紺足袋を用ふる者一人あれば、水仕事に汚れ目立ずして便なりとて、我も〳〵之を用ふ、當節誰が始めしともなく、帶上したる帶の上から、細き紐を以て其フヮ〳〵したる部分を締めること始まり、何處の家の下女も此の便法を行はざるはなし、帶上を大きくしたる以上は、此法は勞働者に取りて誠に便法なり、その代り身躰の周廻りに纏たる物の數、落語家の所謂三十六本中にもなりなん計り、若し誤つて石油でも浴びて火でも付かば、速かに衣服を脫ぐ能はずして大火傷をなすなるべし、

（『經濟雜誌』第八百四十四號）

文藝

作文第一の緊要事

文を作るの修業に、多く名文を讀み、多く名句を暗んじ、多く作文を試むるなどの工夫もありと云へど、取わけて要とすべきは、先づ文章の情を涵養するとにてあらん哉。何如なるを文章の情と云ふと問はんに、其の第一は言ふ迄もなく、美を慕ふ詩歌的の感情にてあるなり。何如んかして此の情を養ふぞと云ふに、四時折々のながめを外にせず、心を濃やかにして其景色を愛し、物にふれて風雅の趣むきを掬するの覺悟こそ專要なれ。かりそめの情けありてだに、世は心を動かすとの澤なるに、一と度び詩歌の念を開きて天地山川の榮枯盛衰を觀ずれば、舞ひて詠ふべき時も、涙にむせんで消入らんとする時も、ともに何れか風雅の催しにあらざるべき。閑寂のたのしみあり、壯大の勇ましきあり、濃やかなる美あり、打しめりたる幽邃あり。怒濤の天に憤激するも、小波のなぎさにひそ〳〵と步むも、一天皆な燒けて八方深紅の色を燃す大空の景色も、泉のちよろ〳〵として白き細き只一すぢの流をつなぐも一碧万里、只た茫洋として涯際なき青海原に、暫らく黑雲白波を動かして一の墨點を走らせつゝある大船のながめも、夜色暗澹として漁火明滅するいざり舟の三つ四つはあらんずらんと見ゆる濱の邊の宵げしきなど、皆夫々の美あり。文に志あらんもの、つねに間斷なく此等の風色を觀じ、夫々の美を味ひしめて、之が風雅の賜物を珍重し、胸中次第

蓄積して遂に八方遍照の美神に接はり、其の無盡の藏に墨水を引いて、吾が生命の筆の端を之に染めなん時には、文心混混として晝夜流れ、筆端自づと動きて、吾知らず文の章は織成さるゝなるべし、之を此れ作文修業の第一堅要事とはなすなれ。

春花枝下落、秋露葉前沈。

花圃の歌垣

隣朝顔　佐藤初子

うらやましわれも植てんとなりなる
　まかきにみゆる朝かほの花

同　兒島櫻子

あるじにはわれもしたしき中垣を
　こゑて咲たり朝かほの花

旅宿虫　舟越艶子

故郷の庭のおもかけうかひきて
　旅寐さひしくこうろきのなく

同　兒島櫻子

年老しみやこの人やいかならん
　旅ねさひしくこうろきの鳴

秋田　舟越艶子

神まつるかくらの音も聞ゆなり
　としある秋の小山田の里

海邊秋望　同　人

磯あらふなみの音のみ聞えきて
　夕霧ふかしをちの海原

山家月　同　人

我やまに茸狩人もかけたえて
　くるれはひとり月そのこれる

兒島櫻子

世の中をうしろにしつる宿なれと
　そむきかたきは秋のよの月

同　人

あつまやのあまりさやけき月よかな
　寐なから見んははつかしき迄

近頃の洪水

ことしの大雨、大水は六十一年目の巡環で、何か天文地理に定まつたる時期あるやうにも思はれ、固より遠大の原因もあることであらうが、さし當つての近因は、山の暴れたると、川の治まらぬとの故で、即はち山林治水の政治が宜しきを得なかつた柄である。先づ、

山林と雨との關係

は古くより識者が着眼したことで、むかし熊澤蕃山が播磨に蟄居してをる時、雨雲が淡路島の山の林の上に掛ると雨が降ると云ふ景色に注意し、之より山林と降雨との關係を研究して遂に備前岡山の山を改良し、名高き治水の大策を施こしたと云ふことは物の本にも出で居るが、維新以後は頓と氣が付かず、諸藩の取締りで厳しく制裁して居つた山の規則も自由となつた故、人々勝手に亂伐するやうになり、政府の役人も初は氣が着かなかつた故少しも此邊の取締を爲なかつた、其うちに、ヅン／＼山が坊主になつたことは、人の頭が辛うじて散髪になつた頃よりもまだ餘程早かつた。かうなれば、雨の降り方に關係し、雨の降り方に關係すれば隨つて川水の出方に關係することは勿論の事である。もと、

山林は氣候の調和者

と云ふ程で、眞に都合よく晴雨を塩梅するものである。何故と云ふに、雨雲が林の上に來掛かるときは、之を引とめて次第に冷却せしめ、林の上又は其の近傍で、サット降り下して雨とならしむることであるが、此の雨は、林の樹々の千葉万葉を潤ほし、又、其の根より傳はつて地下に竄入し、雨水の多分は林の中に貯蓄されて仕舞ひ、其の殘りが少しづつ谷川に流れる。夫故、如何に大雨が降つても、其水が一時に流れ出すと云ふやうなことはない。然るに、林のない所に雨が降れば、其雨水は地を叩いて一時に流れ忽ち洪水となる。林の無い地方に暴雨、暴水のあるは之が爲めである。

樹の葉にとまる雨水の量

は左程多くないやうに思ふものもあらうが、夫は左様でない

一と通りの松や杉でも、其葉を一枚づつ列べて見ると、驚ろくべき哉、ぢきに百疊敷、二百疊敷一ぱいになる。此の面積廣き樹の葉の裏表一ぱいに十分雨水を受とめる時は、莫大の量になる。然るに、雨の時に風が吹くと、此の受とめられたる樹の葉の表裏の水氣を悉皆吹き拂ふゆゑ、降りたる丈の雨は忽まち流れ去り、即ち大水を出す。風が吹くと大水となるは此の故であるが、之によつても樹の葉に受留めらるゝ水量の尠なからぬとが分るであらう。扨て、又、地下に竄入する水は如何であると云ふに、

林あれば木の葉落ち

木の葉落つれば、林地濕潤ひ、林地うるほへば、水氣を吸ひ込んで之を保存するとの永いものなるが、左りとていつ迄も保存すると云ふにはあらず、此の水氣次第に水脈より流れて谿谷の源をつくり、涓々混々として遂に谷川の流の水となり、晝夜絶えせぬ林下の清水を吐くととなる。即ち、林あれば谷川あり、大雨の水も之より傳はり、徐々に流れて一時の大水とならぬ次第である。斯樣に山林は、雨雲を呼びとめて雨を降らせ、其の雨水を保存して徐ろに流すゆゑ、一時に大水が出ることなく、左りとて旱魃になるともなく、氣候を程好く調和し、水の工合を好い加減に支配する一擧兩得の功あるとなるが、もしも此の

山林を濫伐する時

は何如なると云ふに、木が無ければ平地同樣なれば、降つたる雨は其儘流れる許りなるに、かてゝ加へて山の事ゆゑ斜めにして水の流れ早く、土砂を押流すと莫大である。もし林があれば下に草も生へ、土砂を引縛るゆゑ左樣の事もないが、既に林なく草なきに至れば、山の土砂は押流さるゝ許りである。土砂が流さるれば、川底が淺くなる故、水の流は彌々急になる。流が急であれば堤防につき當るとも激しく、堤防をくづさぬ迄も其土砂を押流していよ〳〵川底を淺くする。

川底淺くなれば

僅かの出水も忽まち堤防を超えて、近傍の田畠に汎濫し、橋を落し家を倒し人畜を殺すの慘狀を呈せしむるは、目たゝく間で、實に悲慘の極である。其の元は山林の濫伐にある故、山林の保護と云ふとは、至極大切なとしてある。昔し、お上の

木一本盜んで死刑

に處せられたは、あまり慘酷のやうであるが實際は左様でない。之から亂れて多くの人が難儀をするとを思へば、嚴刑を置て之を取締るのが即ちお上の慈悲と云ふものである。近頃は避暑かた〳〵

箱根山中に遊ぶもの

が多いが、箱根の氣候は段々惡くなるではないか。好天氣と思ふ間に忽ち濃霧一面に立こもり、眞にあやめも分かぬ眞白世界となり、袖しめり、肩さぶく、何とも言へぬ不快な心地がする。何故マア此様に氣候が惡るくなつたかと、村長はじめ大相心配して何か天命の逆運のやうに思ふて居る人も多い相だが、天は故なく無情なとをしたでは無い。必竟は自分で箱根山中の木を伐りつくし、四面の山を皆な坊主にした報ひである。今は早や致し方がない、速に木を植えて先づ〳〵十年二十年の後に其の罰を償ふより外はないとゝなつた。

ことしの大水

も必竟は此の類で、近年山林を暴らした天罰と思ひ、恐懼して此後を愼しみ、誤つたる所は速かに改ためるやうにするが

肝要である。夫に、昔しはなか〳〵治水に苦勞して川の堤は餘程の手入をした、なか〳〵今の様な受負普請でない。此事は近頃ろ勝先生が大相くはしく談されて既に新聞にも出て居る。そして、堤の上には

柳を植た

何をくよ〳〵川ばた柳、水の流を見て御座ると古人が歌つたが、此柳は天職を重んじて水の流を一圖に見つめ、いざ大水と云ふ時は眞先きに犠牲獻身の奉公をした。即ち、此の柳を切つて、土堤の水ぎはに縛りつけ、水のあたりを緩うして、堤の毀れるのを防いだ。又、其根は、土堤の土を固めて容易にくづれない様にした。然るに、維新後の役人は少しも御存知なく、柳が風にゆられて動いては土堤の土をこはすと云ふ書生一流の見識で、わざ〳〵此の柳を切つて除けられた。太平無用の犠牲となり、あはれ退けられて犬死するとかと、其時柳が恨を吐いた相だが、之より大水の害がひどくなり、堤も屢ばきれた。定めし柳の亡魂の報いであらふ。

隨筆

信、望、愛、三佳人の圖に題す

信と望と愛とは、三つにして一つなり。

未だ見ざるに之を信じ、人の疑がふときに之を信じ、之を信ずべきの理由を自覺せずして尚ほ之を信ずるは、信の粹なり。信は克己の人、献身の人、大勇猛の人にあらざれば、堅くすると能はず。風に飜へされて海の波の如く動き、響に驚ろきて篁の村雀の如く騒がん輩に、信の天使は伴ふとなし。信ある人は、總べてを疑はざるが故に、總べても亦吾に逆らふとなし。其の天地は宏く、其の安住は豐かなり。

望なき人こそ哀れなれ。之を最とも命短かきものと云ふ。刹那に生きて、其刹那にすら安んぜず、つねに危ゝ岌々乎として煩悶せんとす。之を彼の死地に祝ひの宴を望み、鞭に情けある教訓を察し、逆境に順流を念じて不幸乃はち幸福の種たるとを覺るものに比べては、何等の相違ぞ。黒き雲のあなたに日輪かゞやき、夜の尤とも老する所ろ、曉あり、流究まりて大洋に出で、落花散つて後ち木の實の熟するとを思はゞ、既に信ある人たれか望なきを得んや。

愛はこれ本性なり。たゞ信堅く望長きの人にあつては、此の愛いよ〳〵切なり。神を信ずると深きものは、人を信ずるとも亦深し、其の假初の弱點を見すぐしにして、其永遠の生命に望を置けば也。信じて心を與へ、望みて誼を長ふす、愛隨がつて切ならざるを得ざるなり。

左れば、信と望と愛とは、一つに連りて互ひに増減す。其の姿異なるが如けれど、其種はひとし。之を三にして一、一にして三たる三位一躰の秘義に比らぶ。基督、吾等をして愛を悟らせ、聖靈は信ぜしめ、エホバは望を懷かしむ。此の三つを合せ得て人初めて完たきを得べく。而て先づ必らずや此の三の一より入つて後ち其奥に達せざる可らず。玆に其の姿をうつして各別の美を見さんとするものあり。仰いで望み、凝視して信じ、俯して愛するもの同に麗はし。望むものは、光にかゞやき、信ずるものは務に勇み、愛するものは滿たる許り護持懷抱して離さず。悉とく是れ青天に覆はれて、白雲に

乘ずるを見よや。

右三佳人の元圖は、獨逸伯林にありて近時有名の作たり、某氏畫く。博士五島清太郎氏近頃ろ畫ゝ飾りて示さるゝに、女徳最高の理想を形はして遣憾なしと思はれ則はち茲に寫して製版せしめ了んぬ。

秋の夜のともしび

さびし氣なる秋の夜のともし火を圍みて、親子打くつろぎて談しする時ぞにぎ〳〵しけれ。ともし火も亦た溫慈の光をはなちて心地よげに其興を助けんとはすらん。焰にもいろ〳〵あり。預言者の熱火の焰となりては、不義の罪を燒つくすべし。祭壇の高き焰となりては、聖なる誠心を天に達せしむべし。茶毘一片の焰となりては、愛着戀思の肉軀をつれなくも香り盡さんとはすらん。但だ秋の夜の和樂團欒のともし火は、溫和なる慈悲の焰をもやして人心の鬱結を解き、融和圓滿の愛を一つに合せて人情至清の樂しみを與へんとはする也。鴻雁の天に急ぐも其の家を慕ひてか。ねぐらの鳥のさわぐも夜をこめての物語りの聲か。遠く砧の音を聞き、近く庭もせの虫にさびしさを催ふす時も、親子一火を取圍みての悅樂あれば、浮世も亦た幸なる哉。ひとり片影を顧みて亡き人を憶ひ起すなどあれば、光景俄然一變して、燈火も亦たさばたたく如く見ゆるなるべし。

老人逸話

(一) 北風大火事あらん

ことしの天災は此春から、己らが八釜しく言ふて置たに誰も馬鹿にして居たが、ドウダイ、當つて來たではないか。實地の經驗と云ふものは恐ろしいものだよ。何んでも今年は變だナと思ふ覺があるから左樣言ふのに、今の若僧は、ヤレ理論だの、哲學だのと云ふて悟りと云ふものが無いから、少しも話が出來んよ。

見なさい、東京は之から北風だよ。北風が吹くと今年は大火事だよ。本所深川あたりの貧乏人はどうして此暮をくらすへ、火でもつけて何かに溫まるより外はないじやあ無いか。夫を惡るいと云ふても仕方があるまいじやないか。救つてやる政治の無い方が餘程惡いじやあないか。

己らは、己ら丈の火事の防ぎはチヤント仕て置くよ。家のぐ

るりの貧乏人に、夫々手あつくして惠んで置くのだよ。サア其時と云ふになつて驚ろいたつて仕方があるものか。物は機先を制するより外はあるまい。

己等は警視總監でないから、東京全躰の事は如何んとも仕様がない。構はない只だ己等だけの家を防で置うよ。(向島に家を持てる某老先生述懐)

女ごゝろ

山下石翁編

(一) 女はねつきもの

勝海舟、嘗て天璋院殿、及び、和宮の事に談じ及べる時、曰く、二方とも○○○を信じ玉はざりき。○○○は才子にて、氣休めを言ふと多し。女は男と違ひ、ねついもののゆゑ、聞に合せの氣休めを信ずるとなし。信ぜざるのみか之によつて其人物迄を見下げるもの也。幕府の末に當つて此の二方は餘程よく物が分り居たり。平生二三百人の侍女に圍まれ、あれ此れの評判を能く聞いて居らるゝ故、事情にも通じ、夫々の人物を明らかに辨まへ、其上女の常として野心と云ふものが無き故、男子の及ばざる卓識を有せらるゝともありし也。

(二) 愛情の借錢とり

閨秀小説家ビーチヤー、ストー夫人の小説には、婦女子の氣質を寫すとの眞に迫れるもの多し。彼の多病利己にして良人に我儘なるアウガステンの事を叙するの一節に云く、

愛情はもと交換するものなれば、かの温かき情なき婦人にして能く他の親愛を引付け得べしと思ふは大なる誤解なり。無慈悲と云はん程迄に他の愛情をはたり請求するもの、天下、かの利己的の婦人の如く酷なるはあらじ。彼女自身が無愛相になればなる程、いよ〱嫉妬深く、いよ〱手厳しく他の愛情を請求すると、たとへば最後の一錢をも遣さゞる迄に貸金を取立る人の如し

(三) 男女誘惑の相違

太田錦城は、男女の誘惑の秘密各自に異なれる樣を説きて且つ曰く、男子は目上の人に迷ひ、女子は目下の人に迷ふ、芝居などに演ぜらるゝ不義密通の所作はよく此の人情を寫す云

云と。これ一應は當れる觀察なるが、之は本來生めきたる考のある男女に付きてのみ言ふべきこと也。即ち、淫猥の情あるたはれ男、蓮葉娘などに付きてこそ言ふべきことなれ。之に反し、實際、眞面目にして平素生めきたる劣情などなき族が、たゞ過度の交際と、ある程度の禮法を破りたる結果、眞と誘惑せられて思はず罪を犯すに至るの秘密を考ふるに、ハウソルンの『スカーレット、レッター』などこそ能く此邊の情義を寫したり。即はち、男子は、憫れみの故に、女子は尊敬の故に、遂に一歩を踏あやまる。「ピチー」と「レベレンス」とは「ラブ」の隣なり。男子はかなたより、女子はこなたより、即ち此の迷宮に踏入ることそ悲しけれ。

女人成佛の事は何れの宗にも其沙汰あることなれど皆女人は五障の雲深ければ其身其儘にては佛になる者なきと云へり是故に釋尊出世の本願とも云ふ法華經にも龍女成佛して既玉へとも猶も變成男子にての事なり又阿彌陀如來超世の悲願にも同じく變成男子と建て玉へり然るに我宗にては一切衆生の色心の實相は常に是れ毘盧遮那即ち平等智身にして皆是れ六大の所成也と談ずるが故に女人とても此平等智身六大所成の外なければ皆悉く成佛せらるゝ也是を以て高祖大師は若有二信修一不レ論二男女一皆是其人と仰せられたりさればいかに五障の罪深くとも秘密灌頂の壇に入る三平相の法を受け機數相應する時は速に成佛することを得るは獨我密教不等の談にして他門の知らざる深趣なり(密宗安心教示章)

史傳

懷舊 御殿奉公

かもめ筆記

御一新の前後に亘りて、さる中國筋一大諸侯の、亡世子が後室に、女中として仕へまうせし、或る老婦人に就きて、其世の奥向きの有樣を承はりたるに、樣々語り傳ふべきもの多かる中の二ッ三ッ、爰に書い志るすこととなしぬ。惟ふに諸侯の奥向きと雖も、幕府の大奥に異ならず、いはゞ之を寫して縮少したるものとも見るべきなれば、一藩邸の奥向にての實歴談は、之によりて、千代田の城奥深き處に行はれしことをも、また他藩なるをも、大分推知せらるべきなり。

○女中方はいづれも、朝は明け六(午前六時)に起き出で、同時にお上にも御目覺めあるなり。お上の御目覺めあれば、お次ぎの間にて、御手水召さるゝに、緋緞子などの、坐布團の上に召されて、ヂッと御手をつがね居らるゝ處を、御側の方、糠袋などもちて、御顏洗ひ參らせ、了りて顏にも襟にも、厚

板のやうに、御白粉を召され、また御臙脂をも用ゐらるゝなり。また一日おきに。御髪上げらるゝと定まり居るに、其折は朝げ、先づお上の未だ床の中に御寢なりある時に、御側のもの參りて、梳き上げ參らせ、其後にて、起きなほりありて、結はせらるゝとぞ。女中もまた同樣に、一日おきに髪結ふに、銘々の部屋にて、これも寢床の中のまゝに、自分召使のものに、髪梳かせしがこれは至りて心地よきものなりと、彼人の申されたり。

○平常の衣裳より、お三日、祝い日、五節句、三ヶ日の服裝に至るまで、色々樣々の綺羅贅澤を盡くしたる着料を要するとて、御殿勤めは、親元の身代狂はせなれば、仲々に出來るものに非ず。祖母とか、叔母とか、また母とかいふものが、御勤めした時の、衣裳があるといふにて、それを受け繼いで、上るものが多かりしなりと。女中にても縮緬の夜具に、紗の蚊帳などゝ、贅澤をきめ込み居たる位なれば、お上の事はいふまでもなく、衣裳は七日目毎位に新裁のものにとりかへられ、一度び脱ぎすてられたるものは、二度と手を通さるることなし。さる品々は納度に仕舞込みて、一年に一度づゝ、お納度拂と稱して、これ等を女中方に分け與へたりと云ふ。因みにいふお上には、夏向き蚊帳を用ゐらるゝことなくて、蚊のいらぬやうに、あつらへられたる寢室に御寢なりしと。斯樣に贅澤至らざることなかりし、諸侯の奥向が、世の變遷に連れて、今では自ら庖厨裁縫の勞を執らるゝ奥樣さへあるに至りたりとは、偖て〳〵變れば變るものかな。

○お上には決して御門外に出でましになるやうの事なく、殊に後室にてましませれば、殿の御渡りなんどいふこともなく、且や未だ封を受けられざりし世子の未亡人にておはしたれば、外々の諸侯の後室などとは異なりて、現主の御訪問などいふこともあるべくもなかりき。されば奥向きいと靜かにて、お上には茶の湯、挿花などゝ、いづれも其道の人を抱へて學ばせられ、また一通り繪畫の道の心得もあらせられたれば、それ等を樂しみに、日々を送られたりとか。また時には御氣に入りの女中と共に茶の湯を遊ばされもし、また草双紙などを繙かるゝこともありたり。正月などには、御自分の部屋に、女中共を召し集へられて、カルタ遊びをなさしめて、お覽になりしとぞ。月に一度は、屋敷御抱へ置きの能師參りて、

能狂言あり。また狂言師といひて、女の舞子抱へありて、毎月一二度其藝を御覽に供へたり。

○毎年暮の煤掃きの折に、其年内に御奉公に上がりし御末のもの新參踊りといふことをなしたり。これは幕府の大奥にも行はれ、また處々の藩邸にも行はれしことゝ見えたり。幕府大奥にては新參踊りといふは、裸躰踊なりしよし聞き及びたるが、此藩なるは後に長き擂棒を横差しにし、似合の歌を歌ひて踊り廻りたりとか。お側向きの女中方なども、內證にて之を見物に行き、時にはキサクなる女中の、お上を唆かせ參らせて、ソトそれとは知れぬやうにして、お見せ申すこともありしとぞ。併しさる事など、もしも表向にならんには、いと事六ケ敷くなるべかりしなり。

○奧向の御奉公は、一方にては甚た氣樂に諸藝の稽古も出來て、宜ろしき樣なるものゝ、また同僚間の折合、流石女同志のことて互に捌けざれば、氣骨の折れ、心遣ひの苦しきものなりき。お上が、誰れそれ此用をなせと、名をさして御召になるときには、早や外のものは、此人はお氣に入りなりと嫉み、いそしく働いてゐるし、またさうせずはわろく、其邊のきり盛り、いとゞ苦しきものなりき。先づ〳〵新參は、飽くまで故參の表向きの功の立つやうに、取計はねばならず、されば下向きの用事は新參なるもの、進んで之を勤め、また上向の御用は成丈故參に讓るやうに心掛け居るべくして、例へば御煙草盆を召さるゝに、新參の者は御居間の傍まで持ち行きて、故參の者に手渡しゝ、お側に差出して貰ふ位の有樣にて、何んでも、新參者は、故參の人の爲に、椽の下の力持ちとなるべかりしなり。新參の者が、一寸とでも怖いなどといはゞ、それこそ夜に入りて長局の廊下の暗き處へ、箒に着物を着せ、般若の面を被ぶせたるものを立たせおきて威かされ、折々夫れに驚いて氣絶するものなどもありて、さる時には、手早くも其作り物を隱して、何も居らぬに、憶病など、重ね〳〵に意地めらるゝなり。また猩臙脂を溶きて、河豚の皮の水鐵砲に含ませて、平素惡しと思へるものゝ廊下などを通るとき其顏などを目掛けて、夜の暗がりに乘して誰れとも知れざるやうに、注ぎ掛けなどす。さる難に逢ひたるものは、不意にヒヤリとするものあるに驚き、ソと手にて觸つて見れ

ば、眞赤なものなる故、血のやうに思ひてビックリし。これが爲めにまた白無垢などは臺なしになつて仕舞ふことありしといふ。

○御一新の際の、色々騒がしかりし事などは、奥向にては、お表の人の誰も知さゞりしかば、決してさる事ありとは知らず。お國表へ御引き移りありし時なども、二三年前より、さる御沙汰のありし事故、たゞ何かの御都合上、左様に成りしものとのみ思はれたりとぞ。また御國より、東京御引移りの時には、先祖代々二三百年が間引續き御支配ありし其領地を見捨てゝ、殿様御上京となるを惜みてか、多勢の百姓等蓑笠に竹槍持ちて、御城の門に詰め掛け、御籠を擁して、動かさず、何程説諭しやうが聞き入れず。仕舞には鐵砲を打ちて威したるにそれでも退かねば、止むを得ず、折角御門際まで出でたる行列も一旦引き返して、また御城内に入りたり。十日計りも過ぎて、百姓共の戒嚴やゝ弛みし時、殿様も、奥方様も、後室様も下々の者も、皆分れ〳〵になりて、竊に門を出で、皆々船にて落合ひて、遁ぐるが如くにして上京なしたりしが、其時は、實に怖しき心地したりとぞ。

兒藍

幼年文學と漣山人

鷗村子

今の文界、文人才子、雲の如く、霞の如くに多く、各特異の旗色を飜へして、其得意の伎倆を磨きつゝ、我劣らじと競へるが中にも、彼漣山人が幼少男兒の性格態度を描き、其稚な遊びのなからひを寫すに長じたるとは、業に已に定評のあるとにて、其邊に於ける緻密と巧妙とは、當時山人と肩を比すべきもの他に非らじかし。如斯きは此作者が頗るよく、小兒なるものゝ性情に通じ、之に同情を寄すると厚く、自身もまた、をさなげなる品質を有し伴ふに天才を以てするものならずんはあらず。聞說く漣山人が居室には、式亭三馬が江戸の水の看板と、奈良人形とを飾り付けありとか。人は三馬の通と、人形の雅とを以て、山人が理想の歸着する處といへども此人の眞面目は必ずや、今の多くの小説家に喜ばるゝ如き、

○通がりたる、江戸の水然たる御白粉臭き點には非ずして、却て人形を弄んで、欣々乎たる、其小兒らしき處、其無邪氣なる處にあらんなり。其俳句の如きものさへも、
小兒らしき景をとりなしたるものに、
尤も秀逸なるがありといへるは、更に亦た、漣山人が特色の大に此處に存するを證するに足れり。漣山人の小說家としては、早く其文名を成したる割合に、其伎倆に進境の認めらるゝと尠く、餘程後進の作家にして、續々と彼が名を壓して、其上に拔け出づるものも多し。先づ今の文界の狀態ながら、漣山人の小說作は、第二流以下の地位に在るものといふべきなれど、其中にも稚き人物を描くの作者としては、我國の文壇に在りて、啻に今時に逸れたるのみならず、古へにも稀なるべき腕前あり。なほ〳〵欠げたる點に對して、希望すべき處多しと雖も、漣山人たるものは、此特色によりて、其文學の名を成すべきなり。

幼少男女の態度を描くに長じたる、漣山人が伎倆の基く處は、軈て彼等が爲めの御伽譚に於ける、其成功の原因なり。こは唯に御伽譚よ、小兒だまし、、、よと、今の學者ぶりなる、または通人めきたる文界の人士は、之を造作もなき事のやうに思ひくだし、一概に幼年文學を輕んじて、之を見返らぬものもあるべけんが、さらば今試みに彼等をして、
漣山人に代りて、少年世界の幼年欄に、一篇の御伽譚を草せしめよ。尋常ならば、一度び其が椽大の筆鋒を動さんときは、よしや忽ちにして、雲霧を起し、蛟龍を舞はしむべきばかりの靈妙の用をなし得る程の、豪の者なりとても、今紙面に臨んで、犬が、猫が、鳥が、蟲が、木が、草が、何うしたとの、かうしたとのと、此等のものが人語を解し、人事を行ふやうの、大人から見れば、實に馬鹿氣たる話の筋を作せんとせば、想鈍り、筆澁りて、假令見事出來上りたりとするも、之を漣山人に成れるものと比ぶれば、まかと是ぞと擧げて言ひ難き妙處の、彼に在るもの、之に欠げたるが爲めに、大に見劣りせられん。

猿蟹合戰、かち〳〵山
桃太郎の昔話は、いつの世の小兒も、母との寢物語に聞いて、喜びとするものにて、其話に現はるゝものは、猿も人なり

兎も人なり、雉子も人なり、引臼も人なり、孰れも人の如く語り、人の如く働くものと作られあれども、之を聞く小兒は決して、此怪事を怪しとすることなし。もと小兒が心には、人間以外非情の何物にも、活動ありて、人間の如き所作あるものと想像するの傾向ありて、たゞに雛様事、飯事にて、人形をば、活動ある人間と假想して取扱ふのみならず、禽獸、蟲魚、草木に對しても、人間らしき感覺を有するものと、妄想して、格別怪しともなさず、その大なる想像力によりて却て目に觸るゝ万物を人化して、これと對談する眞似して喜ぶが如きことあり。漣山人は巧みに此妙處を捉ふるものなり、これ即ち其御伽譚に成功するの第一要件たり。

幼少者の爲めに、御伽譚を作り、またはさる類のものを話しするに、多くの人は、寓意敎訓を主として、何や、かやと面白可笑しき話をばなしたる其末に、急に述べ來りたる談話の寓意を明かにして、敎訓を說く。然るに之を聞くの小兒等は決してさる敎訓に頓着するものにてはなく、また之を眞に心に染むやう解し得るの能力あるものにてなく、たゞ話の筋の面白可笑きふしをのみを喜ぶ。さればまして、發端から仁義忠孝など、說き聞かしては、多くは小兒を飽かしむるに足らんばかりなり。小兒は、

譯も造作もなきやうの話を

却て喜び、また之を話し與るゝ處の人が、己と同様に其話を喜ぶものならんことを欲す。小兒の性は、尤も厚く他人の同情を求むるものなるが故に、之に應ずる同情を寄せて、自からも小兒の位置をとりて、譯もなく、取り止めのなき話を面白がりて話せば、小兒は之を聞いて、大なる興味を感ずるなり聞說く漣山人の、御伽譚を草する自からも亦甚だこれを樂しとするものなりと。こは即ち其獨得の伎倆を得たる所以の理なりとす。敎訓の積りにて、話をなす時には、話す方の人に、敎ふるといふ觀念のあるによりて、自然六ヶ敷き事も言ひ出し、之をまた小兒の方にては、其智識にて解し得ぬものあるによりて、話の面白味の薄きを感ず。漣山人の作中にても、寓意敎訓に成れるやうのものは、御伽譚としては、劣れるものにて、表面にいひ顯はしてある可笑しげなる事より外に、意味もなきが、其上乘なりとす。幼稚なる小兒に對つて、仁義忠孝などゝいひきかした處で、そは勞して功なき事たるに

過ぎず。また強ちさる事をば彼等に聞かさずとも、差支のなきとにて、無乃、譯もなき無邪氣なる話をば、話すもの、聞くもの共に喜び樂しんでなすは、小兒に與ふるに、罪のなき、ノンビリしたる性質を以てするとを得べし。されば此點に就て、幼稚園、日曜學校などの甚だ注意すべき必要あるなり。

御伽譚はまた話のいひまはしを、巧みに面白く、小兒を可笑がらすやうに、作り成すの必要ありて、而して漣山人は此點に於て尤も長じ、筆を下す、毫も澁滯究屈の跡形なく、いひたきとはモウ是丈けだと言ぬばかり、また不思議假想の人物が、躍々活動し、而も其容姿いづれも無邪氣、可憐に描きなされたり。之れをば小兒自身に讀み得ぬとも、之を其儘讀み聞かすか、或はまた其文句を談しぶりに寫して話すとも、いづれにても、大に小兒を面白がらせ得るが故に、其御伽譚が他の同種類に秀いでたり。これも亦蓋し山人が自ら深く之を作するとを樂しむが故ならずんばあらず。

然るに今爰に如斯くに巧妙殊絶なる漣山人の御伽譚の話の種の種類に就いて、聊か觀察せんに、山人の妙筆と雖もなほ、

人間の所作を種とするときには、其禽獸、草木非情のものを人視して、話せるものに比して、見劣りのせらるゝは、必ずしも山人の伎倆の、爰に不足なるが爲めなるにはあらずして、寧ろ小兒の爲めには、人間の所作は、一方には、いつも目馴れて、あまりに平凡なるき、また他方には、またあまり複雑にして解し難きとあるによるものなりといふべし。然るに禽獸、蟲魚、草木の類の、人間とは全く形ちを異にしたるものが、己の十分に曉り得らるゝやうなる、單純なる人語を談し、人事を行ふといふには、万物を人化する其想像の念を喜ばしめて、興味深きを覺ゆるなり。試みに今一人の小兒に對つて、お隣りの太郎さんと、お向への次郎さんとがこれ〳〵のお話をしてと話し、また蝶々さんと蜻蜓さんとがこれ〳〵のお話をしてと話しゝ、而して兩者いづれか、彼を面白がらせしかと顧り見んとき、其話の筋はどちらとも同じものにてあるとも、舞臺が人間と蟲けらとの差異ある丈けにて、後者の彼を喜ばせしと更に多かりしを知らん。蓋しその尤も多く、小兒の嗜好に適せるが故ならずんばあらず。また禽獸、草木の事となるときは、おなじ喜怒哀

樂をいふの話にても、人間の事として見るよりは、淡泊にして、小兒の嗜好に適し、これが爲めに劇しく其心を感動せしむるやうの事なきを以て害なし。

偖て小兒は人間以外非情のものを人化して之を樂しむ時代を過ぎたる先づ八九歳以上の年齡にも達すれば、自分と同じやうなる幼少男女の所作の話をきくを多く喜ぶに至る。而して漣山人の伎倆は果して、此要求に應じて此等の精神を養ふに足るべき高尚純潔なる談話を作り得べきや。山人が妙筆は、禽獸、草木等非理の動きを爲す筋の御伽譚の上に十分に存すと雖も、今爰に至りては、未だ大に山人の作する處を以て滿足すべからざるものあるなり。前に述べたるが如くに、其幼少男女の態度所作を描くの伎倆は、當時之に若くものなしと雖も、今之を假りに

かの『小公子』の著者なる

ベルチツト夫人に比ぶるに、甚だ及び難きものある所以や漣山人には、無邪氣なる精神の滿つることありて、猶未だ宗教的熱誠の足らざるものあるによらずんばあらず。ベルチツト夫人の如きは、吾人其作品を讀むのとき、宗教的熱誠、いたく文字の裏面に活動せるを見る。素より夫人は女性の身なるを以て、微細に幼少子女を描き得るの特權を有して、男性たる漣山人の企て及び難きものありと雖も、なほ山人にして、其宗教心が、一層の熱誠を増して、作品の上に現はれ來らんその時には、彼はベルチツト夫人等と、異なりたる他の方面に於て、大に成功せんと疑ひなし。

然れども漣山人が明治の文士として、其御伽譚の幼年文學に於けるの成功は、日本文學ありて以來、未だ聞かざるものと稱する敢て過賞に非らざるべく、また其幼少男女を描くとに於ての伎倆も、亦た兎に角に殊絶を以て稱すべし。吾人は漣山人を以て尋常小説に於て、よく成功するものなりと認むると能はずして、專ら幼年少年の世界を舞臺として、既に得たるの伎倆を動かすに宗教的熱誠を以てして、爰に其椽大の筆鋒を振舞さんときには、山人たるもの必ずや、明治文壇の一大光彩をなすに足りて、更にまた其文學によりて幼少者の敎育に及ぼすの功、決して尠少ならざるべし。

問答

○男女自から擇ぶの可否

昔しの契約法を亂暴なりとして、西洋にありとか云ふ男女自から擇ぶの法を可なりとし、所謂ゆる自由結婚を特の外の開化と言ひ做したる一時の流行は既に衰ろへたり。然し乍ら實地の可否は果して孰れにか存すると問ひ掛たる人に對して、記者の

答へ

たるは。此事一圖に西洋の皮相に惑溺す可らず、又舊弊のならはせにのみ拘泥す可らず。亞米利加などにては、男女の學生、幼年時代より共に學び、何の氣なしに交際して、無心無邪氣に勝手の附合を爲すと久しければ、其の間に自然にお互ひの氣質を知り合て公平なる撰擇を爲すとも出來べけれど、我國目今の風習は全く之と違ひ、イザ交際して互ひに知り合はんとする段には既に双方有心にして淡泊の附合ひを爲すと出來ず、互ひに修飾して僻を隱すが人情なれば到底其の眞相を知ると能はず。又、外國にては、男女年頃になれば、小説を讀み、小説中に書現はしたる人情を尋ねて略ぼ人の氣質を辨まへ、尚且つ屢ば交際社會にも出でて異性の特色を學ぶとなれども、我國の男女は、互ひに異性の氣質を知らず、即ち男子が女性を知らず、女子が男性を知らざると誠に驚ろく可き程なり。中にも、女子は人情を研究するとが好なれば、其の父親又は兄弟の氣質に吾自己を比較して、扨て〱男と云ふものは斯樣のものか位を承知するともあれど、男子に至つては一切無頓着に暮し、加之、從來、女を輕ろんずる習慣に僻して眼中女性の研究なく、小説を讀みては架空の想像に流れ、實際の交際には宜しからぬ婦人の外、接見する樣もなく、遂に眞の女性を學知するとてはあらざる也。勢ひ斯の如くなれば、我國今日の男女青年は、其年頃に達する迄に、相手の異性を辨識するとなし。抑そも撰擇の標準を承知せずば、如何で能適當の採擇を爲んや。故に男女相會し、一見異樣の感觸を起さば、心中自から驚ろき、是最上天縁の招く所と速斷して、輕々迷信惑溺するともあるべし。到底、自から合性

など云ふ者を判斷するとは出來ざる也。されば、吾人は今程の交際時代に於ては、青年男女が自から撰擇する方法を危險なりとし、暫らく古風に隨がひて而して稍や之を改良し、今に方つて男女兩性の事をよく〳〵辨まへ居る種類の人に相談して其判斷を乞ふか、又は父兄先輩など既に自から婚事に經驗ある人の撰擇に任せて、さて最後の一二應の見合ひを爲し、瞥見直覺の自然のさし示しによつて斷定するが、今の所ろ先先、比較的の安全法ならんと信ずるもの也。

○夫婦相互の信用今昔如何

とも云ふべき奇問を發して質疑せる人の曰く、昔しの妻は家內に閉居して他し男を見ず、男子とても吾が良人のみなれば、天にも地にも此れに優るを知らず、元來比較の仕樣なければ、たゞ〳〵之を渴仰頂禮し、只管ら歸依信服したることなれども、方今交際の道やゝ開け、人々往來して夫婦夫婦の附合も亦行はるゝとゆゑ、吾良人の外に人の夫を見ることも尠なからず、自づから比較權量して長所短所を見出すこともあるべし。比較研究が宗教の確信を動かすとのある如く、此の良人の研究も亦た多少不吉の結果を來さゝるとなしとも言はれず。即ち、夫人、其夫を天として只だ一天張に尊信したる昔に較べては、今の細君たるものに多少の誘惑なからずやと問へる也。

記者の

答に

そは、良人の方に在ても同然の事なり。昔しは餘り他の細君を見ざりしが、今は之と交際するが禮の一つともなりて、其の品格風采を知悉することも出來べきゆゑ、吾妻に比較して、何等かの品定めを爲し得る場合は昔しよりも增したりと言はざる可らず。左れば、物の暗黑面に入つて、人の輕薄なる弱點の側より觀察すれば、比較研究の自由によつて、伉儷互ひに唯一委賴の信用を減殺すべき誘惑は、文明開化の故によりて新たに出で來りたりとも言ふべきならんが、もし光輝の側に立つて、人の誠と善き情合との動く所ろに察すれば、斯る場合となる程、夫婦の信愛いよ〳〵增加し來ると觀ぜざると能はず。即ち、妻は吾良人が多くの善き賢婦を見玉ふにつけて、さこそ妾に見劣りし玉ふらんと案じて一層愼しむともあるべく、良人の方に在ても亦た男子相應の戒しめはあるべし。

況してや、交際いよ〳〵開けて、ホンノ上邊の附合が彌よ煩らはしく、人の浮薄たる空世辭が表面に浮んで、人情の淺々しき虚式が見え透くほど、心を許して万事を相語るものは只だ吾が伉儷のみと感じて、今更の如く心にお禮を云ふ塲合もあるべし。左れば、好き人情の方より言へば、此等は總て其誠を進歩せしむる種となり、薄き人情の方より言へば、何事も其誠を減却せしむる誘惑となるべし。結果は、事物の上に存せずして吾が心得の如何による。薄情冷淡の人に對しては、何等の善きとも之に益を與へんとは難かるべしとは答へき。

雜録

戰時看護婦たりし我經驗

なにがし女

日清戰争正に酣なりし、明治廿七年の秋、おのれ故郷に在りけるが、此處に近き、某の軍營所在地にて、戰地より歸り來る病兵負傷兵救護の爲めに、豫備病院の開かれしより其赤十字社支部は、之を輔助するとて、救護員を組織して、地方醫師を傭ひ、またかゝらん時の爲めにとて日頃養成しおきたる看護婦を集め、なほ其足らざるを補はんが爲に、臨時に篤志の女子を募集して、速成にて看護の業務を習得せしむることありけり。其頃おのれは、兼てゆかりある其地某の女學校に、遊び旁參りて、暫し滯留してありけるに、此募集に應じては如何にと、人々の勸めもあり、またおのれ自らも平素看護術をば勉强なさま欲しく思ひ居りしとなり、且つは外にさしたる用務もなき身の上なり、同じ學びの窓に學びたりし、二三の友も之に應ずといふに、心促がされて、おほけなくも、容易ならぬ此務めに入ることとなりけり。看護學などいふものをば、そこ〳〵に、駒の足搔よりも、早く學び了へせて、明る年の一月になりて、いよ〳〵該赤十字社支部の引受となりたる豫備病院の、バラツクに出入して、實地の看護に從事することとなりき。

偖て今よりは實地の職務に服すといふ、其間際までの我等の心づかひは、一方ならぬことにてありけり。日頃見受るに、兵士の中には、元來教育の極めて乏しく、血氣壯んに荒くれ立ち、剰さへ身持ちも餘りに良からぬが多ければ、常は處女の身の、彼等と摩れ違に道行とありてさへ、心地悪しく感ぜらるゝに、況して這般は、戰塲

の血に飽きて、いよ／＼猛しくなりたるべき、彼等が群れの中に立ち入りて、晝夜其室を同じくし、また時には近く病牀に接することさへあるなれば、餘程堅き決心ある女子ならずは、良く其職分を盡くさんこと難かるべしなど、心ある人より聞くことも屢なりければ、更にも恐を抱きたり。

又年若き女子の兵士を看護することは、我國にこれまで例なかりしことなりしかば、看護の業務よりは、むしろ患者の取扱ひに困難するなるべしと、人も我も思ひ居りて、掛念も尠からざりしに、いよ／＼實際に臨んでは、前の掛念配慮の多くは、殆ど徒爲なりしを見て喜びたり。看護婦が服務するまでは、男子の看護人を用ゐをりしに、其頃は患者の兵士等、甚だ從順ならず、やゝもすれば亂暴を試みて、其取扱ひの困難多かりしといふに、我等女子が看護する事となりてよりは、以前に變りて、患者等靜謐に、よく命令を奉じて從順なるにも至りければ、上官の如きも、これでこそ病室らしくなりたりなど申されしこともありき。然れども此患者の大方は戰地より送られ歸りしものなりしかども、負傷兵はいと少なくて、かなしきことには、已等が不行狀によりて招きたるいふも忌はしき悪疾を煩へるが其過半數を占たることとて、性行の嘉すべきものゝ少きは、かくときくさへ想像さるゝばかりなれば、これが監督素より尋常ならず。重症患者なれば、止を得ず靜まりかへつても居たれ、僅ばかりの銃創、凍傷または其他の輕き外科病に罹りて、未だ全く治愈せざれば、退院を命ぜられざる位の、多くの輕症患者などに至ては、其身にさしたる苦痛の感ぜらるゝにてもなきゆゑ、終日終夜臥し勝にてはありやうもなければ、竊に禁を犯して、よからぬ手遊びをなすことなどありて、往々看護長の鋭き眼光にかゝりて、見顯はされ、いたく譴責せられ、果ては打擲せらるゝものあり、また強て他の病室に移さるゝものなどもありき。如斯きこともありしかど、概するに患者の、我等看護婦に對するは、頗る從順なるものにてありき。

彼の患者の如きは、徒然なるに堪ざるまゝに、よからぬ事をも仕出かすことなればと思ひ、上官等の許しを得て、益ありと思ふ書物を、そこゝこより借り集めて、彼等の乞ふがまゝに貸し與ふることなどありしが、何時しかに、讀書の聲、病室內に高まり、筆算または習字などゝ、自分の好むまゝに、勉强するもの多くなり、

美風如斯くこの處に嘉ずるを見て、議員も我等も共に喜び敢へりき。彼等の中にて、解し難き文字、諦め難き算術などあるものは、我等を見掛けて、看護婦さん、此字はどうしても字引には見付りません、この算術は何んだか譯が解りませぬ、御暇ならば、どうか一寸教へて下さいなどいふとも屢々にて、何事もよくは知らざる己の如きものは、彼等の質問の日に日に繁くなるまゝに、遂には一冊の袖珍字書を、服の衣兜に入れ置くこととなしたり。彼等は一ツぱし立派の男子にてありながら、我等如き女子に向ッて、文字の不審を尋ぬるに、厭々ながらといふ風はなく、耻づる容もなく、折角質問に出掛けて來たるものを、他用に忙はしきをりなどに、今はいけません、といふ聲少し荒ければ、狐鼠〳〵と逃げ歸る樣子など、其他彼等の擧動の、いかにも、

無邪氣にして、小兒らしく、

處女の前に立て、何事にも從順なるを見て、これが彈丸雨飛の間を馳驅して、命を何とも思はぬ、武き兵士なるか、これが忌むべき罪に沈淪して、今の惡疾を釀したるものかと、感慨其邊に到れば、不思議の思ひに堪ざらしむるものありけり。」

患者等も常に我等看護婦に同情を寄するものゝ如くに見て、業務忙しき折りなどには、看護婦さん、御手傳ひ致しませうか、此寒い時候に、夜も碌々、寐なさらないで、病人のうるさく呻く聲や、咳聲などを聞きながら、この廣くて淋しい處に、夜明かしまでして、御國の爲めだと、お思ひなさればこそ、かうやつて、私達の看護とて、仕なれない事まで、して被下るのだもの、無理もいはれませぬ、戰友さうじやないかなど、可愛の眞情を打明かして、室の中央なる四角の火鉢を圍みつゝ、語るもあれば、またさなり〳〵と寢臺の上より應ずるの聲も聞えて、さるときは、いとゞあはれにやさしく感ぜられたり。

患者中に某と呼べるものありしが、此者は在鄕中既に不運放蕩の子にして、親の持て餘ましものなりし位なれば、入營後にも、屢脫營を試みて、

幾度か入牢もなし、

頗る上官を煩はせしものなりしが、其惡疾を患へて、入院さされしに、在院中は誠におとなしく、殊に我等に對してはいと從順なりき。あるの日の事、彼は其一命も危からんほどの、劇しき手術を受けしが、其自業自得の罪の報酬たる手術の後、血色全く褪せて、痩せ衰へたる面もちにて、堪へ難

き苦痛を忍びつゝ、涙を流し、悔悟の色を示して、吾等が聊かの志しに向ひて謝したりき。多くの人々は、彼こと一時の感情にて、悔悟なせしかのやうに見ゆるものなれども、何これが永續すべきものかはと、いへりしかども、其退院後、己と彼と途に二度三度相逢ふとのありし時には、いつもながら其擧動、先日の少恩を忘れ難くするものゝ如くに見えたり。また某といへるもの、此人はやゝ思慮もあり、また温和なる性質にてありしが、退院後、我等の中の一人に書面を寄せて、心籠めたる謝禮を述べ、其文中に左の如き言葉もありたりとか、あまりに優しければ、己もものに記し置きたるなり。

……病中は勿論、其後とても、折角の御深切を蒙り候海岳の御恩は、乍不肖生命のあらん限り、神魂の續かん間は、決して御忘れ申間敷候、隨て一寸御訪問仕り、御高襟御伺ひ、兼ての素懷開陳仕度は山々に御座候へ共、獨身者の小生故、數々推參仕り候ては、玲瓏潔白なる御身に、彼是御心配相かけ候のみならず、他人の見る目も如何哉と存じ候間、此度は聊か遠慮仕り云々

己れ智慧なく、德卑しき身を以て、おほけなくも、病傷兵士の看護の事にたづさはりたるものなれば、彼等の益をなせしとも いと尠く、顧みれば、此職務を奉じたるとの事實の、今に殘れるさへ、耻づかしきばかりなり。年若くして、經驗もなく、且や七八年の間、

女學校の學窓に我儘に

暮しなれにし身なれば、馴れざる職務に服して、いとゞ苦しく覺えしかなれども、また些なりとも得たる、此經驗によりて、益を受けたるとも少からず。やゝ悟り得たりと思ふが中には、たゞに兵士の看護のみならず、何人を看護するとにても、こは敎育なくて、年うら若き處女の預るべきものに非らざるやう思ひ實に多くの熟練と、決意厚き婦人ならでは、看護の尊き精神を盡し能はざるものなりと、我等互に感じ敢へりき。

加ふるに又、看護の道を學び得たりといふにもあらぬものが初めより兵士の看護などに從事して、前にはいと難事なるべしと憂ひゐたりし程にも似ず、荒くれ立ちたる猛き男兒が無邪氣に、さも

小見らしく振舞ふ

さまなどを見たる、其やさしの、遂に忘るべくもあらざるを感じ、今なほ折々思ひ出でゝは、感想彼パラックに到るとわるなり。

如何んか是れ美人

すれ男

余は多くの美人を見たるものなれど、曾て世の人の謂ふ所の美人を佳と思ひしとあらざる也。此は、われに美人を鑑識するの眼なき故かと一應は自から疑がひたるともあれど、飜つて思案し、否な〱然らず、矢張り吾が鑑定こそ優しきものなれと自信して已まざる也。

世人の多くが美人とする所の美人を、何故吾はひとり賞賛せざる乎と云ふに、此等の美人が如何にも美人らしく自から任じて、妾こそ美人なれと言はぬ計りの樣姿せらるゝが甚はだ醜くければ也。其の漆の如き黒髮の風に飜がへり、其の丹朱の唇の花弁ば開くが如き、楊柳の腰なよやかに、紅の裳ちらほらとほのめく氣色。之を優ならずと剛情張るにはあらず。然し乍ら、一旦其風采を見て、其の美人らしくする景色を眺むれば、他のもろ〱の快感は總べて消失せて反つて不快に堪へざる也。試みに、其の容姿を一瞥すれば、彼子は直ちにツントすまし、「ハヽア妾を御覧なさるナ」と言はぬ許りに横にそむけて氣取る趣きは、悪らしき迄に心地わしし。其時如何んぞ之を美人と思はんや。

之に反し、余が恍惚として愛慕の情に引かるゝは、彼の質素素朴にして、自から其美なるとを知らざる田舎片里の純潔なる處女にてある也。其の身態を取つくろはず、其應接を眞實にして、絶えて自からの容色を氣にとめず、美人とはお江戸にあるものと信じ居るいぢらしき風采を觀るときは、余は古の詩人が牧女野孃に醉へるも此心なんめりと思はるゝの情もて愛慕禁じがたきに至る也。

故に余は未だ曾て盛んに裝はひ麗はしく飾りたる都風の美人によりて一線だに誘惑の情を引かれたるとあらず。たゞ女學校の卒業式など謂へる、其の多數の美人が一處に集まり居る所を見て初めて女も美しきものと氣付き、ヲツトン小説中のクチルム、クリソグリーと同じく、「成程!、女も斯く集まれば見物なり」と發明するまでの事なり。其他に何等の情を

も動かしたることなし。
ひとり彼の埋れたるらしき美人、即ち此邊には美人あるまじと思ひ居る邊に埋れたる美人に會するときは、俄然一線を打れて全身恍惚とし、其美に醉ふて歌ひつゝ止まざるに至る也。例せば、草を苅る處女、茶を摘む村里娘、又は下女子守、もしくは機織、もしくは田舍の茶家の仲居などに合へば、其の純潔質素なる美の容姿に見とれ、珠を砂子の內に見出し、花をいばらの間に摘み出でたらん心地して、立も得去らず眺めくらすことのある也。
惟ふに必らずしも余ひとりが變人にてはあるまじ。余に同情を表せらるゝ人もあるべし。余は平素自から戒しむ、汝必らず田舍娘に誘惑せらるゝこと勿れと。此れ惟一の戒めなり。何となれば、他の都門の美人に惑はさるゝことは決してあるまじければ也。
左れば、八方の美人に告ぐ。變人をもて余輩一流とのみ見做して侮どり玉ふこと莫れ。凡そ、美人の美たるは、其の自から美人たることを知らざるにあり。美人の最大禁物は、其の美を自覺することなり。妾こそ美人なれと言ふ樣姿せらるゝを見れば、失敬ながら、其の御横つらを打擲りたくなる也。

髪の毛一すぢ

いちわろ男

坐敷に長き髪の毛一筋でも落ち居るのは、あまり風躰のよきものでなきが、女學校の寄宿舍などにいつて見ると、椽側などに、往々幾筋もの毛が落ちてをり、また庭先きに抜け毛の塊まりが、其處此處に散つて居ることも見受けらるゝは、あまり見かけのよいものではない。頭の上にふさ〳〵と緑の髪をなして居ればこそ、女の寶とも大事がられ、女の美装に欠くべからざるものであれ、それが抜け毛となつて、そこらに散つて居るのは穢いものなり。さる抜毛をもつて行つたのではよもや大象はつながれまい。
たゞに女ばかりではないが殊に、女の爪を長く延ばしてゐておまけに垢などたまらしてをるのは、見られたものでないから、心して切り取るべし。さう〳〵細かくいつて女を責めるやうではあるが、世話にも家に入らば、其臺所を見よ、女學校へ往かば、其厠を見よといふこともありて、其處等で細君

や女學生の、御價値が踏まれるものなり。外へ出ては、恐しう立派な、御粧りをして、エラサウにして御座る婦人方の中に、家の内では、存外不志だらな、ビンダレな所作をなさるものもあるで、其人が平素、心掛の程が此處で全くわかる。旦那のハンケチの垢のついたる、其又足袋の尖から、爪が顔を出して覗いてをるの、靴下の踵に穴の明いたる、それでその奥様たる人の、氣のつかない人であるといふことが知れる。學問もよし、手藝もよし、されど万事に氣を付けると、女にはあらまほしきものなり、

洪水の記

新潟縣 佐藤初子

水無月の名にも似ず、今年はなどかくのみ雨の降つゞきて、晴間も見えぬに、かの作物の上を農人の眉もくもり勝に案じわづらふ事一方なかりき。かくてその月の廿日といふ朝まだきよりは、いよ〳〵かきくらす大雨に、雷のとゞろく聲すさまじともすさまじかりければ、家の内こぞりて物おぼえず、一つによりゐながらさても餘りおそろしさに窓少し許りおしあけみれば、黒雲飛が如く四方にかけ走り、龍のかけるらん状にも似たれば、たゞ事ならじと人々ひしめきあふ。家の老人はありし例をもひき出語り聞えて、人足の用意とくせよ、かくてはいかなる大事に成なんもはかられじなど、あはたゞしう命じたまふ。折しも、家の表に聲高く、下町わたり洪水椽の上に及べりとつげてはしり去。あなやとおどろきかけこもるひまもなう、更に野川の堤や破れけん、いまだ實のらぬ稲の根こされて、山の如きが、あふれし水の流るゝと共に、おしよせられて、こゝもとによりく。つき〳〵に、彼處破れ、こゝあふれて、たちまち市も山田も海となり、木どもはおし倒され、家ながれ人さけぶ。われも其中にありながら、なほ人々の事のみ心にかゝる。この有様を何にたとへなん、かゝる折にぞいかなる智ある人も、これをふせぐ術あるまじう、又情深き人もこれを救ぶにかたかるべし。

さすがに治まる御代のおきてめでたさに、警官はやくも用意ありたりけん、大船をもて涙にくるゝ翁聲をかぎりに泣小供をあまた助けのせ市のめのまへに漕わたる。せめてもの力にこを神佛とたのみて、救の船になどおもひおよぶもこの世ながらの心地こそせね。

かくて日もくれぬれば、この上いかゞあらんと心細う案じわづらふ。漸々雨もをやみ勝に、雲の絶間よりいそなつかしき空のみゆるに、人皆の心地いかに嬉しかりけん。とはいへど、猶一夜のほどはたのまれねば、ひたすらに神に念じてぞ、其夜を明しぬ。やゝ明わたる程に、さても昨日の嘆はたゞ寐ぶらぬよながら、猶さめぬ夢の心地して、今日のあたりなる有様も、現とはおもほえず。おし流されし邸あとに、流れよりにし檣の大木、とり〴〵見るめもあはれならぬかは。更に山田の市を見やれば、さしもにひろき千町田は青海原のやうに成はてゝ、ほどなう八束穂の足穂のほなみよせなんと待たりしは

夜の中の水泡と消ぬ。この淡だになかりせば、ゆたけき御代の萬代となへて、民皆腹つゞみをうちつゝ、今年を安う過しなんものを、と恨むるまゝをかいつらねても、いかでくつたなき筆の思ふまゝをもらしつべき。

時　文

○東西南北

與謝野鐵幹著
同文館發行

『韓にして、いかでか死なむ、われ死なば、をのこの歌ぞ、また廢れなむ』の一首を讀むとき、鐵幹が小悪きまでの、抱負に一驚す。然れども既に此抱負を自白するの勇氣あるに於ては、之に叶へる素養なくんばあらず。宜なり鐵幹が某新聞に公言したるぞが歌道の修養の量の頗る大なるを聞くとや。成程此詩集を讀過するが中に、作家の素養の以て窺ふべきもの尠からず。然りと雖も素養多きが必ずしも、作歌の宜しきを得る所以には非らず。鐵幹の歌の、殊更に勇壯を衒はんとして、勇ましげなる文字を矢鱈に用ゐたるあたり、決して感服すべきものに非ず。無乃平常なる讀み方のものに於て、想思のやゝ酌むべく、語句艷なるものあり。

雲はみな浮世に出でゝ山里にのこるは月と我となりけり
えびらにもささばさすべき花なるを酒に浮べて見る世なりけり
隅田川花やちるらん漕く船の笘に色ある夕あらしかな

これ等は鐵幹自らに於ても陳腐のものなるべけれども、他に比して調よく整ひて尤も見るべきものと思ふ。其

乞兒等が着すてし野邊の朽むしろくち目よりさへ咲くすみれかな
野に生ふる草にも物を言はせばや涙もあらむ歌もあるらむ

の如きは、詩想に於て見るべきものなりと雖も、調に於てなほ未だしき處多きを見る。慨するに鐵幹の短歌想ありて調整はざるもの、其多きに居りて、あまり多くの景を用ゐ、姿に活氣勇壯を飾らんとして、韻致を損す。歌人の歌らしからずして壯士の歌らしきふしの見ゆるはこれが爲めなり。新躰詩に於ても以上の同弊ありて、これまた其勇壯なるは姿の上にのみあり。さればさて艷麗優美なるも乏し。慨するに詩趣に於て譽すべきもの極めて乏しとやいはん。

『東西南北』によりて吾人は鐵幹を以て、未だ詩人としての面目を美はしくまた盛んに備へたるものと認むる能はず。

○希伯來詩 心の緒琴

湯谷紫苑著　敬文館發行

植村正久氏此書に序して曰く、

靈性の銀線、神の恩威に接觸して、至清至高の歡喜を生じ、發して絶妙の歌となれるものは、希伯來詩なり。神と人との間に、疑ひの雲霧朦々として、望み失せ、膽落ち、窕ら生きて奈落の底に沈めるを覺ゆるが如き悲况を叙し、其消息を洩すものも、希伯來詩なり。靈性の音調、一ッとして詩篇に備はらざるものなく、信仰の悲喜哀歡、遺す處なく、皆其の間に著はる。神人愛慕交感するの微を穿ち、罪を悔い、惡を慚づるの道念を發し、弱を憫れみ、苦を救ふの人道を奬勵し、義勇奉公の精神を鼓舞するもの、天下また希伯來詩に如くものあらんや。

と。希伯來詩の妙用を說いて餘蘊なしといふべし。この種靈活の詩篇は聖經に散ずる所百五十篇、今基督教界の一詩人湯谷紫苑氏、中五十二篇を撰拔し、年の五十二週に充てゝ、片山里や、離れ小島の友なき人々の每週道に進まんに、便りせんとて註釋を施したり。註釋の法一篇每に緒言、註釋に加へて教訓を述ぶること親切に、豈にたゞに片山里、離れ小島の友なき人の友たるのみならんや。所在基督教徒彼靈妙なる詩篇を執りて、靈性を修養せんとするもの、此書あるによりて、大に便りよろしきを得ん。

○河内屋（新小說第三號）柳浪作

『殘菊』『五枚繪姿』の時代より一轉して、喜んで悲慘深刻の文字を用ゐ、其戚功を之に托せる柳浪子は、近頃『今戸心中』を以て、其の心機轉變の劇用を巧み

に描いて、悲惨儀鼻の叙述に於ける、多分の成功を示したるによりて頗る其名あり。評者未だ此の作を讀まず、さるに今彼が新作『河内屋』を讀むに及んで、柳浪が深刻文字の成長見るべきを知る。

『河内屋』は『新小説』第三號に載す、かれて『お弓』の名題を以て出づべしさの世評ありしものなり。某保險會社の重役の鈴木重吉さいへるが、某家の娘お久さいへるを慕ひしに、其娘死せし故、せめても の思ひやりに、其妹お染を娶させり。然るにお染は既に重吉の弟清二郎さ情交を約せしものなれども、母の勸めに止むなく重吉が妻さなりしものゝ、情緣美しからず、お染常に病を稱して清二郎を慕ふてやまず、淸二郎また失意の餘、放蕩に身を持ちくづしたり。重吉は彼等二人の中を怪んで、怏々不平に堪へず、下谷邊りの待合の女のアバスレ者のお弓にかゝり、お染への當てつけに、此女を我家に引き入れんさせしに、お弓元來淸二郎に心あるもの、それが爲に重吉に付くはいやくながら、鈴木の家内に入れり。機を見てお弓淫慾を清二郎によりて遂げんさして、清二郎の爲に退けられしより、之に憤りて、淸二郎への當付けに、いよくお染を苦しめ、お染絕食命旦夕にせまる。淸二郎百方苦心して之を救はんさし、不快の念禁じ難きながらも、お弓の淫慾を飽かさせんさせしに、圖らず重吉あるありて、爰に悲劇の大團圓に達しぬ。淸二郎は不覺、算盤を以て兄を打ちて氣絕せしめたり。之を見るや、兄死したるものさ信じ淸二郎の心機急變、最に重吉の振上けし仕込杖の落ちたるを拾ひて、お弓を殺し、遂にお染さ共に情死す。重吉は幸に蘇生して耻ぢを負ひて身を藏くせり。通讀して之を察するに、柳浪の本意たる、淸二郎お染が高尙潔白なる戀情の頗る悲慘の極を見たるとを描寫するにありしならん。然れども此點に於ては、甚だ足らざるものありて、無乃お弓を描くとに於て、成功したりさいはん。要するに此作近時小說中の頗る見るべきものさ稱すべし。

山田戀之助の『お濱』格別稱すべきものに非ず。露伴の隨筆、讀むべく、其『小說家趣向帳』は一笑に價す。

○壽王冠者

松居松葉作　春陽堂版

松居松葉が意匠慘憺の作さ稱する『壽王冠者』の筋書をかいつまんでいへは、後鳥羽上皇御謀叛の前後に、近江國佐々木の住人佐々木彌太郎高重さいへるが、園城寺の衆徒さの爭ひの裁判より、京都守護代官伊賀判官光季に恨みを懷きけるに、爰に又光季の一子壽王丸は夜なく高重が一女春姬の箏の音を慕ひ來たりて其笛の音を合するを樂しみさせしに、十二歲の春姬此時より、少女心に十四歲の壽王丸をしたひ初めたり。或夜高重はからず恨み深き人の子壽王丸の難を救ひて、之をしも恨を光季に吐くの便りさせしに、壽王丸父の耻辱を思ひて、恩人を刺さんさして却て捕へられしも、春姬の爲めに救はれ、之を義さして、光季高重の難を救ふとあり。爲めに高重の恨恚全く晴れて、兄弟の義交を結び、壽王丸春姬の良緣成るべかりしに、承久の亂のはじめ、光季一院の兵に攻めらるゝさき、勤王の佐々木は淚を吞んで光季の敵さなりたり。光季一家滅亡し、壽王丸また死するや、春姬刄に伏して其跡を追へりさいふとなり。

全體より評するに、松葉が同じ弦齋張りで、弦齋程アッサリさゆかぬは、一段の工夫を要するものなるべし。また此小說の主眼の勉めて年幼き男女の可愛げなる情愛を描かんさするにありて、却て彼等が年に似ず老成れたちてをかしげなるものさなりたるは、作者の失敗さして見らるべきものなり。去かし當節柄白人むきに難のなきものさして讀むべし。

○名人逸話

風流齋編　春陽堂版

題して名人逸話さ稱すれども、執りて之を見るに、多くの狂歌談を蒐集したるものたり。されは其名によりて其實に就けば、失望するふしの多かれども、亦滑稽解頤、奇事、珍話の、人の頤を解き、秋夜の徒然を樂しましむるに足る。

文學その折りく○實用看護法○たかれの雪○籠まくら○太陽小說第二編○浮木丸○以上批評次號に送る。

○女學論壇一斑

九月下中期

◎婦女處世の困難　國民の友第三百十五號
◎平政子　經濟雜誌第八百四十四號
◎國家の興亡は女子に關する論(續)(文學士宮本正貫)　大日本婦人教育會雜誌第八十五號
◎佛教夫婦論(横井雪庵)　密嚴教報第百六十八號
◎世界女づくし(第一號續)坪井正五郎　大倭心第二號
◎女子の職業(染物。製絨。毛布女工)　報知新聞連載
◎女學の不振　大倭心第二號
◎女子教育一斑(其廿五)三輪田眞佐子　女鑑第百六十八號
◎婦人の實用的智識及び兩性の比較(山田豐彥)　裏錦第四十七號
◎女學校の方針(田村初太郎)　京都府教育會雜誌第五十三號

片々

◎福翁曰く　貧乏世界に富者の身を處すると、易からざるを知らば、馬鹿者の世界に、獨り智能を耀かさんとして、人に厭はるゝは、亦、是一種の馬鹿たるを發明するに足るべしと。

◎何々女史　などいふ豪傑此節澤山に見ゆ、之を集めて一團隊を作らしめ、全く男ぎれなしに、女流の一大新聞又は雜誌を發行せしめたらば面白からん、豪傑も此處までゆかれば駄目なりといふは日本新聞の白雲生なり。

◎民友記者　婦女處世の困難を論じて、之を救ふの道三條を擧ぐ、曰く女子教育を益々盛ならしむべし、曰く有力なる婦人會を組織すべし、曰く婦女の手にて新聞雜誌を發行すべし。

◎千住製絨所　の女工賃金は一等技女三十錢、二等技女二十六錢、三等技女二十三錢、一級女工二十錢、二級女工十七錢、三級女工十五錢、四級女工十三錢、五級女工十錢、試驗女工八錢、幼年一級女工八錢、同二級女工六錢にして、一日規定の勞働時間は九時間なりといふ。

◎『女鑑』紙上　健筆よく三輪田女史に次ぐを以て稱せらるべき某女史は、某文學士の令妹にして、曩に許嫁の良人、忽焉として流水落花に誘はれしより、庭の姫松操堅く、志しを學業に專にするを以て芳名あるものなりときく。

◎某新聞記者　幸田女史を訪ひて音樂談を聞かんとし、十回ばかりも其許に足を運びたるに、女史辭するに、已れ只官命によりて歐洲樂研究の爲海外万里に旅せしとはいへ、何とて意見の何のとて、世に吹聽せらるべき學才なきものなりといふを以てす。

◎山梨日々新聞　女學雜誌を評して曰く、釘裝文字ともに瀟洒として聖拔したる例の如く、脂粉の飾を一掃せる浴後佳人を見るの心地し醜婦の濃粧に優る萬々なるも、慾には一朶の紅薔薇を綠鬢に挿まんは、姿態横生の感あるべきに、一歩を轉すれば、枯燥の域に陷り、俗諸けせざらんを氣遣はしめぬと。

◎勤業の志　社會を益するに篤きが爲め、米澤地方の眞綿製造の業を視察研究せんとして本年一月單身家を出で、數百里程に旅し、米澤境に險を踰え風雪を犯し、遂に志を達して歸國せしといへる熱志の婦人は、石川縣雪沼郡瀧部村の人三尾某の妻つや子本年廿八歲なる人なり。

◎染物類　の流行皆は藝人社會より始まりしも、今は高等社會の貴婦人より始まり、藝人輩は却て其後を追ふといふ。之れ教育ある婦人が、多くの嗜好を有せるによるなり。

◎流行すべき色合　三四年前まで紫色の如きは誰も顧みるものなかりしに、近年非常に流行し、帶、襟等何に限ぎらず紫色を喜ぶに至りたり。なほ今後流行すべく思はる色合は素鼠、栗梅色、玉子色、鼻色、千草色、お納戶色、無地葛蒲皮色などにて、珍柄にては、更紗模樣の小紋などならんといふ。

◎當世髮風　につきて國民新聞の流行子の觀察する處を見るに以下の如く報ぜり。丸髷は今春よりも稍大なるかたにて耳も冠中の厚味も同樣なるを好み、根は高きかたにて結上げた處でむつくりと品能く厭味のない風を可とす。髷形は歌舞伎形最も多く行はるゝが如し、すじめ形はちと廢れなり。島田も根は高きかたにて下町にてもずつと品格のよい處流行す、これは新橋の藝妓社會の嗜好に感染せし者か。新橋は其客重に紳士と稱せらるゝものなるが故に其藝妓等も諸事上品につくるためか、島田の風頗る上品なり。髷こんもりと高まり前より見れば富士の形を爲し、ふたも十分たつぷりにて先づ申分なき處なり。銀杏返は十分大いなるかた流行す昨冬よりも餘程大きくなれば　根も隨つて高からざるを得ず。

鬢、たぼ共につまるは、髷の形大なる影響もあるべし。前髮は細く起りて次第に廣く末になつて一文字におさまること一般の流行なり、丸髷にても、島田にても、銀杏返にても前髮のとりかたは同じ。

◎新秋　織機虫の鳴く音さへ聞ゆるばかりになりて、賤の手業のゆるかせに休らふべきならればと稱して、報知新聞は三伏酷暑中一旦中休みになし居たる『女子の職業』を再び揭載し始む。

◎婦人會の演說　此頃やうやくに流行せんとし、音樂會そろ〳〵秋風の颯々木々を鳴らすの聲に競はんとし、殘花連等は時に小兒の爲めに一種の音樂會を設けんとするの計畵あり。

◎佛教夫婦論　をなして佛教は女權保護者の雄なりと論じ、往年の田中智學を學ぶもの、近來やゝ多く密嚴教報の横井雪庵もまた此類なり。

◎婦人雜誌　數二十有一、倘ほ此他に吾人の知り及ばざるものあらんか、なほ吾人未だ之に接せざるも『智德會雜誌』なるもの亦其中のものなりといふ。

◎稲舟女史　死するや、曩に其業行を譏りたるものも、筆を倒にして之を哀み、美妙を罪す、明治評論此時に當りて曰く、女史を殺すものは文學其者の罪なりと。

時報

◎皇后陛下の御好學

至仁至慈なる　皇后陛下の御心を學藝の道に傾けさすることの深き、今更申すも畏けれども、陛下には曾て小松宮妃殿下より奉呈する大日本女學會發行の雜誌を此上なう愛で讀ませられ殿下は月の二十五日（雜誌發行の日）を以て、必ず奉呈することゝなし居りしに其後は鍋島侯爵夫人代つて之を奉呈し　陛下の御愛讀いよいよ深かりしが、先月は夫人病を伊香保に養ひ在京せざりしを以て、其月發行の雜誌奉呈の事やゝ延引せしかば、陛下には御心元なき事に思召され、畏こき御沙汰さへありければ、夫人は大御心の厚きを感謝し、直ちに奉呈したりと承はる。（讀賣新聞）

◎第七回世界禁酒會巡回員クラ、、パリッシユ女史

同女史には、去月二十二日横濱來着の筈にして、既に同日東京なる矯風會々頭矢島かぢ子、外二三の人々は、歡迎の爲め、出濱ありしも、到來なかりしは、布哇に立ち寄られし故なりといふ。何れ不日來朝ありて、其面目に接するとを得べし。女史は米國イリノイス州の人、夙に身を禁酒矯風の事業に奉じ、當時米國婦人禁酒會附屬青年婦人禁酒會の維理として、會内に頗る有力なる地位を保てり。風采美しく、禮儀正しく、加ふるに雄辯よく人を動かすに足るものありて、既に米國にて少からぬ事業をなし、今や米國婦人矯風會が禁酒事業海外擴張第七回の巡遊者として、先づ其收穫を我邦に試みんとするものなりといふ。

◎女子高等師範學校生徒募集

來る三十年四月、女子高等師範學校へ入學すべき生徒、凡そ五十名募集に付き、右志願者は身体健全品行方正、且年齡は十六年以上二十年未滿、尋常師範學校二ヶ年の課程を終へ、若くは之と同等の學力を有し居る、志願者に限り十月三十一日までに、東京府廳内務部第三課に宛て願書を差出すべしとなり。

◎舊南部藩内海嘯罹災者救助婦人會

曩日の三陸大海嘯の際、舊南部藩內のみにて罹難者六万人を出すの慘狀ありしより、同鄉人等は之が爲めに、救助會を起し、漁具農具供給の目的を以て金員募集中なるが、爰にまた同鄉の婦人諸氏は、罹災者耐寒の用を充たさんが爲めに、江湖の有志者より、衣類義捐を乞ひて、之を分配せんとして、本多貞子、田中館きみ子、那珂盛枝子、長嶺げん子外二十名其發起者となり、南部伯爵夫人、同子爵夫人等の贊助を得て、既に九月三十一日までに、多數の義捐品を集め了りしが、其輸送配付は十月上旬を以て初め同月下旬を以て終はる豫算なりといふ。

◎大阪婦人慈善會慈善市

同會にては十月九日より三日間、北區堂島商品陳列所を借り慈善市を開き、其揚り金を以て府下罹災民の救恤に充つることに决し、其通券は一枚五十錢なりと。

◎近江婦人慈善會

同會は既に滋賀縣下各水害地に金三百圓を救恤し、今回は大津町、罹災貧困者に施與する臨時義捐金を募集せんとて同地園田篩手田寺原三夫人發起と爲り、目下盡力中なりといふ。

◎熊本私立尙絅女學校の盛况

熊本私立尙絅女學校は近時益々隆運に向ひ、其名漸く遠近に顯はるゝに至りしを以て、入學を希望して諸方より尋れ來る者殆ど虛日なき程なるに同校は最早溢るばかりの多數の生徒を敎育し居り、此上入學を許さんとするも得べからざれば、已むを得ず之を謝絶するとあり。爲めに折角遠方より來校するも、入學するを得ず、空しく引き歸へすこと多しと云ふ。

◎女子語學校　東京築地なる女子語學校は今回英佛獨三國人の語學教師及び女子高等師範學校卒業生を聘して、各國語を授け、併せて高等女學校程度の諸科をも教授し、三ヶ年を以て卒業せしむるとこなれり。

◎征臺軍人慰勞　大坂日本婦人會は先に征淸軍人に色紙、酒肴料等を送りて、其勞を慰めたりしが、今回又昨年十月三十一日迄の征臺軍人に對し、前同樣の物品金員を送らんとて、其旨大阪府知事に依賴したるよし。

◎高知縣高岡婦人講話會　實業、敎育、衞生、宗敎の範圍內に於て互に抱懷を吐露し、智德を啓發し、兼て親交を篤ふするの主旨を以て、高知縣高岡郡高岡村に設置せられたる婦人會は、同發會式を去月十九日高岡町池孝吉氏邸に於て擧行ありしといふ。同會の發企者は同地基督敎傳道者片岡氏の夫人なりとぞ。

特別會員（イロハ順）

侯爵 伊藤博文
伯爵 井上馨
伯爵 板垣退助
岩崎惣十郎
五十嵐敬止
井上藤太郎
伊藤一隆
伊豫田德次郎
伊藤鑄之助
猪俣吉平
巖木善治
早川智寛
馬場民則
原田助
仁平豐次
本多庸一
東奥義塾
德差藤兵衞
土居勝郎
德富猪一郎
侯爵 大山巖
伯爵 大隈重信
子爵 岡部長職
大脇克佶
大井上輝前
小倉格
押川方義
子爵 渡邊國武
渡邊澤次郎
勝間田稔
加藤宇兵衞
川口榮之進
片岡健吉
神田乃武
鹿島秀麿
勝田孫彌
金澤彥作
伯爵 吉井幸藏
竹村槌六
田村顯允
高田耕安
相馬愛造
相馬理三郎

對馬嘉三郎
中野武營
中川嘉平
村松龜一郎
植村澄三郎
子爵 野村靖
野村新一
日下義雄
陸實
久保扶桑
楠本正隆
八尾新助
谷津菊右衞門
八木橋榮吉
前島密
松村介石
福原允
藤澤幾之助
子爵 榎木武揚
遠藤庸治
江原素六
安藤太郎
阿波松之介
厚地政敏
齋藤信太郎
櫻井一久
佐々本宣耀
佐和正
佐藤錢太郎
榊吉洋芽
山東直砥
坂木直寛
佐野喜代吉
佐伯陽一
清浦奎吾
北里柴三郎
北垣國道
菊池九郎
三宅雄次郎
三枝光太郎
水野義郎
三好退藏
子爵 品川彌次郎

島貫兵太夫
島田操
島田三郎
澁澤榮一
平田文右衞門

本部泰
世良田亮
鈴木眞一
鈴木重遠
杉村濬

通常會員（イロハ順）

石川和助
岩淵謙之助
入江祝衞
伊澤修二
今井榮吉
池田米男
石田英造
今井茂助
岩本久米三郎
岩谷よしの
石山治三郎
伊藤泰造
猪又齊平
岩淵文右衞門
磯野員爲
石田源吉
岩谷幸助
石澤末次郎
池袋宗政
石田祐安
今野甚伍
猪股良太郎
五十嵐良碩
橋本宗之進
橋本經光
長谷川有造
林弘之
萩原佐朝
秦孝道
原賢次郎
早坂貞次
長谷川忠助
原胤昭
間牛四郎
西牧廣
丹羽清二郎
贄田剛橋

新渡戸稻造
丹羽金十郎
星野久成
星野光多
細野貞次郎
芳賀重太郎
細川瀏
戸川平八
德永平次
土井久壽彥
沿谷喜八
德光太次郎
戸田長八郎
豐島三篤
戸川安宅
富田廣信
小方仙之助
大石憲英
小崎弘道
小野英二郎
大久保寅吉
岡眞吉
押川つれ
岡部久吉
大室障夫
岡本一之助
大竹敬助
大橋代吉
尾花芳重
奥村忠太郎
太田莊十郎
太田六四郎
小野寺義卿
小野宗助
大環修
大家與次郎
奥山十平

小野川駱駝郎
小館隼之助
大塚賀久治
岡本米藏
奥野太郎兵衞
小野田卓彌
和知牧太
若生德造
分部盛之
渡邊喜久
渡邊俊治
渡邊美賀
渡邊常吉
蒲田府
川合信水
河合篤叙
鎌田普三郎
勝又昱
鎌田三之助
加藤政之助
龜谷卯之助
川崎敬三
川口源三郎
加藤勝彌
吉田龜太郎
吉田潤吉
田澤粕三郎
田村武治
竹内清明
田中耕一
高橋深三郎
龍居賴三
高木壬太郎
田中義一
田代進一郎
高城龜三郎
田口榮吉
谷山豐熊
高杉榮次郎
高野源之助
高橋俊英
大同圓次郎
武市健雄
田丹神幸三郎
高山善右衞門
高橋敬太郎
男爵 伊達邦成
但木良次

伊達基寧
庄司鐘三郎
筒井助熊
塚本道遠
土田熊治
磯瀬仁右衞門
土橋藤市
根本正
名山保太郎
倉橋盛次郎
奈須川光實
村上春太郎
村上勉次郎
上田重眞
鶴桐友三郎
浦山助太郎
上末仲之進
上山金之進
野崎民之助
工藤善太郎
楢美冬次郎
熊谷駒之助
栗原宗治
桑原慶太郎
栗田彰吉
熊野雄七
栗林五朔
山内龍吉
山崎熱次郎
山川儀吉
山下廉
矢野鏡太郎
柳田喜兵衞
山路綱吉
山城彦熊
八卷文綱
松田[illegible]太郎
松田順平
益子惠之助
增子喜一郎
松岡智見
松田常吉
横武
眞水重逸
松木誠助
松浦國之助
松田陸三郎
桝潟友吉

松浦保治
松井三郎
松崎誠一
福井捨介
古澤繁次郎
福田錠二
福岡文太郎
福澤定興
深田藤治
深田憲治
二見嘉次郎
小林光茂
小島玄
後藤顯美
小西增太郎
後藤嘉右衞門
小松重弘
古賀公平
小出龍太郎
後藤元城
小山善太郎
小泉秀一郎
小島今朝次郎
海老名弾正
遠藤元貫
寺澤籍一
寺岡重之介
寺井純一
新井章司
秋保[illegible]晴
秋山春齋
荒木眞弓
青山好惠
相見磐
青山正光
荒生治右衞門
荒井幸作
厚谷善平
秋山峻
佐藤彦三郎
佐藤榮右衞門
佐藤丈輔
佐藤勝治
佐藤庸男
佐藤三郎
佐藤豊四郎
佐藤長二
佐藤久作

子爵

佐野亮
佐々木市造
佐々木廉藏
佐々木純一
佐々木榮介
櫻田顯章
作岡萬吉
佐藤勝三郎
佐藤清
齋藤常太郎
佐々木重四郎
佐藤實太郎
佐々木和策
齋藤恂
佐藤昌介
篠森宇一郎
齋藤壬生雄
北山巖
北山長次郎
北山彦作
貴山幸次郎
木村斧彦
木名瀬宏
羽山三四郎
喜多島淺[illegible]郎
菊地宅藏
三島彌太郎
三上久滿三
三澤富之助
宮本甚兵衞
三浦宗三郎
宮崎八百吉
三濱正綱
宮崎金吾
宮川經輝
美山貫一
三浦虎彦
宮島昇
南泰作
島崎宜信
清水正史
實相寺利民
信太壽之
芝山幾作
神宮荻八
鍋池宮惣治
光小太郎
日野愛熹

平澤幸太郎
日野貞治
平岡彌五郎
水野小平
森野左近
本川源之助
森善太郎

尺秀三郎
芹川[illegible]一
菅田勇太郎
須藤鬼一
鈴木味右衞門
菅波至善
鈴木太郎作

東京麴町區富士見町二丁目三十二番地

大日本海外教育會

○大隈伯は金五百圓、野村子爵は金三百圓、岡部子爵は金三百圓、鈴木眞一氏は金三百三十圓、押川方義本多庸一二氏は各百五十圓寄附せられたり。其他の寄附は追て報告すべし。

日本宗教界評論の評論

日本宗教

十月刊行豫告　第二卷四號

來る二十日刊行『日本宗教』には世上是非の評判高かりし**宗教家懇親會**の顛末を記し、其開會前の評論、開會中諸名士の演説筆記、閉會後之に對する評論を叙し、來會者の宗派職業住所姓名を列記す◉論說には右會合席上に於て耶佛兩教徒の喝采を得たる**釋宗演師の長論文**あり戸川殘花氏の「基督教古今の傳道法」は、宗教傳道の新方法を示し、外に岸本能武太　小西增太郎兩氏の論あり◉雜纂には圓環子の「毘陀」愛東生の「佛教詩文」小此木信六郎氏の「獨逸の宗教界談」、某氏の宗教談（訪問記）等、社說と評論とは如例。思潮には**人生の目的**に關する十數頃日喧すしき外山博士派の論議を募集し方今思想界の傾向を知らしむ、此篇記者の最も力めたるものとす。外に「日本人の宗教心問題」を始め、宗教雜誌上注意すべき思潮殆んと之を網羅しあり。

定價一冊八錢、郵稅五厘、六冊前金四十五錢、郵稅三錢見本は一部九錢郵券封入の上申込まれたし。

發行所　**日本宗教發賣所**
東京麴町區下六番町六番地

◎『日本宗教』合本　第一卷第一號より第十二號迄十二冊

右製本出來、貴需に應ず、第一號は殘部少數にて全冊取揃ひの分は、僅かに三十餘部の外、無之爲め、至急御申込有之度し。
正價壹圓也（郵送料は此外に申受く）

發賣所　日本宗教社

女學雜誌定價表

前金	壹冊價　金拾錢 一年前金　金貳圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年十一月九日印刷
明治廿九年十一月十日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可